

仗助の双子の姉がいたら
というもしも、パート
2 第二部『戦闘
潮流』へ

蜜柑ブタ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第四部の主人公・仗助に、双子の姉がいたらというもしもネタ。

パート2。

第二部になぜ仗助と一緒にトリップしちゃったよ、ネタです。

原作死亡キャラが生存したり、ハチャメチャになる予定。

ジヨジヨシリーズの混部が嫌いな方は、バックプリーズ。

そしてオリキャラとかが嫌いな方もバックプリーズ。オリジナルスタンドも出るよ。

オリキャラ、東方ミナミの設定は、第四部編とほぼ同じです。

時間軸的には、吉良戦後の予定。

それでもいいぜ！ OKって方だけどうぞ。

目次

お試し短編 タイムスリップ 第二部

死のウエリング・リング 7

除去不可能!! 21

リサリサ 29

修行中のケア? 44

スーパーエイジャと、エシデイシ

51

エシデイシ その2 67

ナチスドイツ軍人と赤石を守れ!

81

シーザーとミナミ 95

誇り高き意志に添えられし青いバラ

106

ハツタリ 119

戦車戦 139

究極 163

究極にして、最弱とは… 179

未来で会いましょう 198

お試し短編
タイムスリップ
第二部

「…ちゃん、姉ちゃん！ しっかりしろって！」

「うう…ん？ じよーすけ？」

「ああ、よかった。だいじょうぶかよ？」

「えっと…なにがあっただっけ？」

「分かんねえ…。気がついたら変な洞窟だぜ、ここ…。なんか遺跡っぽいような…？」
東方家の双子。

東方ミナミと、東方仗助は、見知らぬ場所で、戸惑った。

「マルクーーーーー!!!」

「！ 今あの奥の方から声が！」

「人がいんのかよ！ ならちようどいいぜ。」

けれど、そこで二人が見たのは、体の半分近くを失った軍人の青年の姿と、異様な不気味さを感じさせる3人の男と、体が半分失われた青年を介抱している金髪の青年と、背筋がしっかりと立った老人と……。

どこか自分達に似た顔立ちをした、若い青年の姿だった。

ミナミと仗助は、なにがあつたのか分からないが、これだけは、ハッキリした。助けないと！つと。

「仗助！」

「おう！」

「!? なんだ君達は!?!」

「どいてください！ 今治しますから、弟が！」

「何を言つて……!?!」

「おい、さわんじゃ……。」

「ドラー！」

「!?!」

体が半分失われた青年に、仗助のクレイジー・ダイヤモンドが触れた瞬間、青年の体がまるで巻き戻されるテープの映像のように直っていった。

「な、なんだこれは!？」

「よっしゃあ、間に合った!」

「ナイス、我が弟よ!」

「う…、シーザー…? 僕は? か、体が…治ってる?」

「おいおいおいおい! どんな手品だよ!?! 今、そこのおまえ、何したんだ、ああん!?!」

「いや、何って…、直しただけっすけど?」

「なおす~~~~~~~~!! 波紋でもこんな芸当はできねえぜ!?! てめえ何者だ!?! へ

ンテコリンな頭しやがって!」

「あつ。」

「?」

「あつ? 今、テメー、俺の頭がなんだって言った?」

「おい?」

「落ちついて! 今は抑えて!」

「ぐげっ!」

ミナミは、今にも自分達に似た青年に殴りかかろうとした仗助の横腹を殴って止め

た。

「お願いします…。髪型にはあまり触れないようにお願いします！」

「あ…ああ…？」

「見ましたか…。カーズさま。」

「……実に奇妙だな。」

奇妙な格好の三人の男が、仗助がやったことを見て、興味深そうにしていた。

「あの三人組…、なんか、やばい気配しかない…。仗助…、コノ状況…、相当にヤバいっばいよ…。」

「へっ…？」

、ミナミに押さえつけられている仗助は、落ち着いてきて間抜けな声をもらった。

「君達は…、実に奇妙だ…。なぜジョジョにそんなに似ているのかね？」

老人がミナミと仗助に聞いた。

「えっと…、それより、私達にどうしてそんなに似てるのか、そっちの方が気になって

…。」

「……お前ら、ただの人間みたいだな？ あそこにいる『柱の男』どもとは全然違
ぜ。けど、どうやってマルクを直したのかがどくくにも気になるぜ？」

「あなたの…、名前…教えて貰って良いですか？」

「あ？ 俺？ 俺は、ジヨセフ。ジヨセフ・ジヨースターだ。」

「じよせ…!?!」

「？」

「姉ちゃん、姉ちゃん！ 今の聞いたか!?!」

「聞いた、バツチリと！ どういうこと!?!」

「おい、お前ら…?」

「な…なんで…。」

「お父さんが、若い頃の姿でここにいるの————!?!」

「……………おとうさん？」

「あつ。」

「あつ。」

ギギギギ…つと二人が振り返る。

二人は思わず、お互いの手を握り合った。大汗かいて。

「やっべく……。どうする？ 姉ちゃん……？」

「どうするったって……。もう手遅れっぽいけど？」

二人の数奇な運命は、戦闘潮流に飲まれていこうとしていた。

死のウェリング・リング

ミナミと仗助。

二人は、想像を絶する体験を、今していた。

ジョセフ・ジョースター。

それは、二人にとって、実の父親の名。

ただし、自分達が、その父が高齢でやらかした浮気の末に生まれた子供達であることは、知っている。未婚の母から、愛の末に産んだことで納得している。

15、16年の歳月のほつとかれた時の末に更に高齢になった父・ジョセフと初対面し、ギクシヤクはしたものの、最後には和解はできた。

仗助は、ジジイ呼び。ミナミは、お父さんと呼んでいる。

その、自分達の記憶の中で高齢（79歳）の父が、どう見ても今の自分達よりちよつと年上ぐらいの若さでいるのだ。

驚かない方がどうかしている。

そして若い頃のジョセフに出会って分かった。

自分達は、間違いなく彼の血筋だと……。

「髪の毛の跳ね具合とか、完全にお父さんに似だったんだ…。」

「お前らさ…。1から説明してくんない?」

「えっ…。あ、その…。説明は…無しじゃダメですか?」

「ダメに決まってるんだろうが。っていうか、おっぱいデケえな?」

「ジョジョ! 君達も! 今はそれどころではないのだぞ!!」

「えっ?」

老人が焦った顔で指差した先には、奇抜な格好の半裸で大柄な男達がいる。

「……………やばい…。仗助のこと見てる…。」

ミナミは、迂闊だったかもと今更後悔した。

マルクという軍人の青年を救うのを見られたのが、マズかったと。

奴らは何か分からないが、ヤバイ…。特に触ったら最後のようなそんな悪い予感し

かしない。

「その人間。」

「……………俺?」

ターバンみたいな黒い物を被っている男が上から目線で聞いてきた。

「今、お前は、何をした?」

「……………答える義理はねえよ。」

仗助もミナミ同様に、あの男達にヤバいものを感じているらしく、冷や汗をかいていた。

「あれほどに死にかけていた人間を、再生できる芸当が…、2千年もの間に人間共に身についたということか？」

「2千年!?!」

「落ち着きな。」

「だつて…。」

ジョセフが焦るミナミの肩に手を置いた。

「奴らは、柱の男つて言われてる連中だ。下手に刺激すんなよ?」

「はしらのおとこ?」

「なんなんすか…? アイツら…なんかヤベエ! 分からねえけど、ヤベエ感じしかしねえつすよ、ジジイ!」

「誰がジジイだ、こら!」

「あいでっ!」

思わずジジイ呼びしてしまい、仗助はジョセフにデコピンされた。

「質問に答えろ。」

ターバンの柱の男が強めに聞いてきた。

「言ったって、分からないわ。」

「貴様には聞いていない。そちらの風変わりな髪型の人間に聞いているのだ。」

「あつ。」

「？」

「ああん？ てめえ、俺の髪型がなんだって？」

「ダメー！ー！」

「止めるな姉ちゃん！」

止める間もなくズカズカと柱の男達の方へ行ってしまう仗助。

「おい、止まれ！ そいつらに不用意に近づかな、死ぬぞ！」

「いや、待ちな、シーザーちゃん。アイツなら大丈夫だろ。なにせマルクをあつという間に治せる力があんだからな。」

「だ、ダメなの！」

「はっ？」

「弟の力は…、自分自身には使えないの！ だからもし死ぬような怪我したら、終わり！」

「な、なんだとお!?」

「ほう？ 髪型のことだけで、我々に近づくと、死にたいと見える…。ワムウ。相手

をしてやれ。」

「はい。カーズさま。」

「ドラララララララ!!」

「むっ!」

彼らには見えないクレイジー・ダイヤモンドの強烈な連撃がワムウという柱の男を襲った。

見えてはいないものの、咄嗟の腕のガードで防いだらしく、ワムウの強靱な太い腕がへこみ、変形する。

「見えぬ! これは、いったい…、ぬっ!」

「ワムウ!」

「こ…これは…、私の腕が…。」

変形した腕は、たちまち再生していくが、元通りの腕にはならなかった。

皮膚も肉も骨も変形し、ありえない形状になっていた。

「貴様は、いったい何者だ!」

「ドラアアアアア!!」

「仗助!」

「カーズさま!?!」

一瞬腕を輝かせたカーズという男から、仗助を庇ったミナミの体が見えぬ斬撃によつて切り裂かれた。

「う…。」

「姉ちゃん!!」

「馬鹿…、もうちよつと…冷静に…なりなさい…。」

「ワムウ、お前にはちと厄介な相手であつたようだったので、手を出させて貰つた。すまん。」

「いえ、…不甲斐ない自分をお許しく下さい。」

「直らんのか?」

「はい。まるで初めからこの形状であつたかのように、このままです。」

「姉ちゃん、大丈夫か!」

「うん…、なんとか…。」

仗助によつてミナミは、直された。

「…:…なるほど、少しばかり分かつたぞ。」

カーズという男がそのさまを見て何か理解したように呟いた。

「破壊された物を直す…、しかもいかなる形にでも自由自在にな。それがお前の力と見た。」

「っー！」

「凶星か？ 実に面白い…。殺すには惜しいが、ワムウの腕をこんな状態にした報いは受けてもらうぞ！」

カーズが腕を振り上げ、腕を一瞬光らせようとした。

だが次の瞬間、飛んできたシャボン玉が当たり、カーズの腕がジュツと溶けた。

「ぐっ！ これは、波紋か！」

カーズという男と、ワムウとあとひとり、その場から飛び退いた。

そして、金髪の青年が仗助とミナミの前に立った。

「あなたは？」

「親友マルクを救ってくれた恩人を死なせやしないぜ！ 下がってな！」

「シーザー、ずるいぜ、俺も加わらせな。」

「お前はいらねえよ、スカタン！」

「なんだと、このスケコマシ！」

「喧嘩してる場合じゃないぞ！」

喧嘩を始めようとした二人に、老人が叫んだ。

「お前らは、スピードワゴン爺さんのところまで下がってな。ここは俺らがやるからよ。」

「でも…。」

「いいから。ジョジョに似てるとはいえ、シニョリータに血は流させないぜ。」

「…姉ちゃん、下がろうぜ。」

「…うん。」

二人に庇われる形で下がった二人だったが、ミナミは、見た。

洞窟内に、自身のスタンド『ブルー・ブルー・ローズ』が生え始めていたことに。

「ああっ！」

「姉ちゃん？ あっ…。」

思わず声を漏らしたミナミに、反応した仗助も見て気づいた。

後ろで始まる、激闘から逃れつつ、ミナミは口を手で押さえて、仗助とアイコンタ

クトした。

どうする？ いや、黙っとく？ ブルー・ブルー・ローズが生えてきたってことは

意味があるはずだから？ じゃあ、黙っとこう。つという感じで。

そういうえば、スピードワゴンって…、どっかで聞いたことなかったっけ？ つと二

人は思った。

やがて、凄まじい轟音が後ろから聞こえ、凄まじい風が吹いた。

見ると、シーザーという青年と、ジョセフがボロボロのボロぞうきんのようになっ

て吹つ飛ぶ姿があつた。

「お父さん！ シーザー…さん…！」

「な、なんとという破壊力だ！ ジョジョー！ シーザー！！！」

「むう…、やはり、この腕では、我が技は完全な物にならぬか…。」

ワムウが放つたのは、神砂嵐という技だった。両腕を捻ることで発生する、凄まじい風による一撃だが、仗助に攻撃され変形した片腕のせいで完全な物にはならなかった。

それが幸いしてか、ジョセフとシーザーには、まだ息があつた。

「は、早く治さねえと！」

「ダメ…今の一撃見たでしょ？ 近づいたら今度は私達がマズい…！ あんたが死ん

だらダメなのよ、仗助！」

「くっ…。」

「ジョウスケ…か。」

「はっ!？」

「我が腕をこのような形にしたために、我が闘技は、不完全にならざる終えなかつた！

このワムウの屈辱の姿を見られたからには、貴様だけはただでは帰さん!!」

「…くっ!」

「それは…どうかな？」

「なに？ ムツ!？」

その時、洞窟中に張り巡らされていたブルー・ブルー・ローズがワムウの足を貫いた。

「なんだ、これは!?! これも貴様らやったことか!?!」

ワムウは、その場から飛び退くが、刺さった箇所から、青いバラの花が咲いて、落ちた。

「やってしまえ! ブルー・ブルー・ローズ!!」

ミナミは、言うことを聞かない自らのスタンドに命じた。

それに答えたかは分からないが、洞窟に生えていたブルー・ブルー・ローズの鮮血色の植物の根っこが三人の柱の男に襲いかかった。

「むむ…! これは、なぜだ…、なぜ私は汗を、冷や汗をかいているのだ!?!」

「カーズさま、これは、ただの植物ではありません!」

「分かっている! ワムウ、お前の足に刺さった箇所から青いバラの花が咲いていたな! 何か分からぬが、コレに何かを奪われたと見た!」

「つちい、いつの間にこれほど生えていたのだ?」

三人が背中を合わせてかたまり、ブルー・ブルー・ローズが迫る。

しかし、眼前で止まった。

「ん？　なぜ襲ってこない？」

「あ……」

「？　まさか……、娘……貴様か？」

「そうだよ……。私だよ。死にたくなかったら、そのまま動かないで。私は、私達は、あなた達にはなんの因縁も無いけれど、ヤバいことだけは分かる。あなた達を生かして帰したくはないけれど……。成り行きで殺すほどつてほどでもないからね。」

「だ、ダメだ！　こ、殺すんじゃ！　奴らを逃がしてはいかん！」

「まあまあ……。仕方ねえんだよ。」

焦るスピードワゴンを、仗助が止めた。

「ふん……！　我々に情けをかけようというのか!?　人間ごときが……」

「そうだよ。見たところ、あなた達にとつて、人間なんてちっぽけで弱っちいだろうけど、それ以上の物を時には背負ってるんだよ。」

「ほう？」

「だから……、消えるなら、さっさと……。ん？」

ミナミは、ふと気づく。

ジョセフがいけないことに。

明らかに何か引きずって逃げたような痕跡があったことに。

その時、フツとブルー・ブルー・ローズが消えた。

「あの波紋使い…、まだ息が合ったか。やはり、腕が不完全では…。」

「嘆きすぎるな、ワムウ。」

「その通りだ。お前の腕のことは私がなんとかしよう。それまで辛抱するのだ。」

「…カーズさま。」

「ほう？　ワムウ、もしやお前…。」

「私の勝手をお許しください。ジヨウスケ。こちらを向け。」

「はっ？　えっ？？」

一瞬で伸びてきた、ワムウの腕が仗助の体に吸い込まれるように入った。

「うわあああああああ!？」

「ふむ…、なるほど、お前は波紋使いですらないのか。波紋を一切感じぬ。だが、死の

契約はこれで成った!」

「何をしたの!？」

「『死のウエリング・リング』!　ジヨウスケ、貴様の心臓の動脈に、しかとかけさせ

てもらったぞ!　33日以内に、この解毒薬を飲まぬ限り、お前は助からぬ!」

「なっ!？」

スポツと抜けたワムウの腕。仗助は、胸を押さえた。

「これは、いわば…私からお前への死の宣告だ。33日後までに、私はこの腕を治し、お前を殺すという証だ。」

そこへ、いつの間にかなくなっていた、3人目の柱の男が戻ってきた。

血だらけのジョセフを抱えて、地面に落とす。

「エシデイシ。お前もか？」

「ああ、この波紋使いのジョジョという男が少しばかり気に入ったのでな。俺もウェリング・リングをプレゼントしておいたぜ。」

「ぐ…くっそ…、最悪だぜ…。」

息も絶え絶えなジョセフが、悪態を吐いた。

「カーズ。お前も埋め込むか？」

「くだらぬ。もとより、我々は不老不死。好敵手がいなくて久しい…。敵があつてこそハリがある人生…、気持ちは分からんでもないがな。だが、我らの第一目的は、『エィジャの赤石』のパワーを手に入れること。忘れるなよ、二人とも！ 行くぞ！」

「ジョウスケ！ せいぜい待っておけ！」

「ジョジョ、せいぜい強くなるのだな！」

笑いが声を残しながら、三人は夜の闇へと去って行った。

「仗助…、仗助！」

「なんてこつたいだ…。姉ちゃん、ごめん…。」

「謝らないで！ あそこでブルー・ブルー・ローズが消えなければこんなことには…。」

「仗助くんと言ったか！ 大変なのは分かっているが…、頼む、二人を…、ジヨジヨとシーザーを救ってくれないか!?!」

「あ、ああ…。分かってる。」

仗助は立ち上がり、虫の息の、ジヨセフとシーザーを治療した。

二人の星が現れたことで、道は僅かに違えた。

ここから先の、旅路と結末は……。

除去不可能!?

あれから、ミナミと仗助は、保護され、仗助とジョセフは、レントゲンをとった。すると、指輪がそれぞれの心臓の血管に知恵の輪のように絡まっていることが分かった。

診た医者が言うには、血管の壁と一体化している部分もあるので、四次元の知恵の輪ですとのことだ。

「グレート…、マジでかよお…。」

「オーノー！ 改めてハッキリ言われるとショックなのによおー！！」

「…：取れないんですか？」

ミナミは、一応聞いてみた。

「現代医学では不可能でしょう。」

ハッキリ言われ、ミナミは目眩を覚えた。

「あつあつ、あんまりだあー！！」

つと嘆くジョセフ。

「あ…、でも、ジョセフさんののは、なんとかなるかも…?」

「おっ? それどういうことだよお!?」

訝しむジョセフに、ミナミが提案し、仗助とヒソヒソと話し合った。

「ようするに、仗助の能力でなら、破壊した物を直せる。つまり、腹を貫いたとしても、どうやっても直るんです。仗助が直さないという意味を込めない限りは。」

「つまりい?」

「心臓を貫いた際に指輪を掴んで取れば、生きた状態で指輪を取り除ける可能性がある。あつてことです。実際、腹の中に入った、異物を、腹パンで貫いて、その際に割った瓶の中に閉じ込めるといふ芸当も可能なんです。こんな感じで。」

「ドラァー!」

「ゲフツ!」

「ちよつー!?!」

その場にいた全員が驚愕した。

いきなり、仗助が見えぬ力で、ミナミの腹にデカイ穴を空けたからだ。

そして引っこ抜かれた際に、部屋にあった空のジュースの瓶が、バリバリと割れながら元の形に戻る。中に、食べたであろうご飯と魚（ししやも）が詰まった状態で。

「こんな感じで。」

「な…、なんともないのかね？」

「痛いのは一瞬ですから。」

「もう姉ちゃん…、なんでこんな方法取るんだよ…。」

「だって証明するには、論より証拠でしょ？」

「す、すすす、すげえ…、すごいとしか言いようがない！ とてつもない力だぜ、コイ

ツはー！」

「OH、MY、GOD！ コイツは、まさに神の助けって奴だぜえ！ 頼む仗助、俺ん

中から指輪を取ってくれよ！」

「いや、ちよいと待ってください！」

すると成り行きを見ていた医師が止めに入った。

「聞くとところによると、この指輪には毒が？」

「あつ？ 確かにそう言ってたな？ それが？」

「指輪には確かに空動があります。しかし、どのような毒かは分かりません。先ほどの異常現象を見るに、相当な衝撃を与える物だと見られますが…、もし衝撃で指輪が破損し毒が流れ出た場合は？」

「あつ。」

「あつ？ つて、なに？ えつ、ダメ？ ダメなの？」

「ねえ、仗助、あんた毒とかって、治療できないよね？ 血管に直接入れられたお酒がダメだったんだし…。」

「できねえ…。」

「だ、そうです…。」

「だそうです、じゃねえよ!!」

「それに…、仮にジョセフさんを助けられたとしても、今度は仗助が…。」

「そうだったな…。お前の力は、自分には使えないんだったか？」

「そうっす。」

「……33日までに、奴らは、必ずお前を殺しに来る。俺の親友を救い、そして俺の命を救ってくれた恩人だ。俺を頼ってくれ。」

「えっ?」

「大船に乗ったつもりで頼れってことさ。」

シーザーは、そう言って笑った。

つまり、シーザーは、仗助を助ける気にいるということだ。

ミナミと仗助は顔を見合わせ、それからシーザーを見た。

「お…:お願ひします。弟を、助けてください。」

ミナミは、ペコツと頭を下げた。

「おいおい、こんなスケコマシに頭さげつと、食われちまうぜ？　俺の娘ちゃん。」
「えつと……」

「俺のこと、『お父さん』つと呼んでたろ？　そういうこつた。」

「まったく、信じられん話だ……。未来のジョジョの娘と息子が、今ココに……。将来は、日本人と結婚とは。」

「……あのひとつ訂正が。」

「？」

「うちの……母……、未婚です。」

「ん？！」

「ちなみに……、かなりご高齢になってからの、子です。あと、歳がかなり離れた甥っ子がいます。はい……」

それが示すこと。

つまり……。

ぎーーーーつと、ジョセフの顔から血の気が引いた。スピードワゴンも。

「あ……あああああああああ、頭の回転が良いだけに、分かっちゃまったあああああああ
ああああ!!」

「ジョジョ!!　なんてことを！」

「あの、未来の話ですから！　ずっと先の！」

「そうそう！　正妻の人と結ばれて貰わないと、色々で大問題ってか！」

「しかし、それでは、君達が！」

「いいんです。母は、愛し合って私達を産んでくれたし、後悔はないって言ってます。た。」

「そうそう。何より俺らもそれで納得してるし、未来でちゃんと和解は…できたっす。」

「強い子達だ…。」

ジョセフに掴みかかっていたスピードワゴンは、涙ぐんだ。

「じゃあ、俺の嫁さんって誰？」

「えっと…内緒です。私達も詳細は知らないんで…。」

「嘘言っちゃいけないんだぞ？　ほくれ、鼻の穴が開いてる。」

「っ！」

「もうここまで来たらお父さんに全部白状しなちゃくい！」

「にぎやああああ！」

「ジョジョー！　てめえ、自分の未来の娘だからって何してもいいわけじゃねえぞ、

ゴラア!!」

「その通りっすー！」

「イデデデデ！ やめてやめて！ いいじゃねえかよ、胸にダイブするぐらいー！」

「ああ…、ジョースターさん…すみません…。未来の実の娘にもセクハラするような男に育ててしまつて…。」

スピードワゴンは、グスンツと泣いた。

まあ、とにかく話をまとめると。

死の結婚指輪は、仗助の能力（クレイジー・ダイヤモンド）でも、取り除くのは困難。（毒が漏れる可能性がある）

そのため、33日以内で、決着を付けないと仗助とジョセフの命が無い。

ワムウが腕を治してから仗助を狙うだろうと思われるので、それ以下の日数で来る可能性は大いにある。

柱の男達の弱点は、総じて太陽の光であり、同じエネルギーを持つ波紋使いの波紋の呼吸による攻撃であること。

そのため戦うには、現在のジョセフの戦闘能力ではまったく足りないし、シーザーも実力不足を痛感している。

結果、33日以内で修行を積み、柱の男達に挑む必要性がある。

「オーノー！ 俺の嫌いな言葉は、一番が『努力』で、二番目が『ガンバル』なんだぜー！

！

「てめーの命だろうが、この野郎!!」

「……なんか情けないなあ。あのお父さんも昔はこんなだったんだね。」

「だな。」

さては、美談を盛つてたな……と、ミナミと仗助は思ったのだった。

「それにしても……。シーザーさん……。」

「どうしたの、姉ちゃん？」

「……私の最も嫌いなタイプかも。」

「あー……、女好きんな奴は嫌いなんだっけ？」

「うん。」

故郷の杜王町で散々ナンパされたせいで、スケコマシなタイプが大嫌いになつた、ミナミだった。

リサリサ

蒸気機関車に乗り、ローマから、ヴェネチアへ。

シーザーが言うには、そこにこれから33日までに波紋の特訓をしてくれる波紋の達人がいるそうだ。

「姉ちゃん、俺、蒸気機関車初めてだよ！」

「私もだよ。」

「お前ら、どんな田舎暮らしだよ？」

「違うもくん、私達の時代は、蒸気機関車が廃れてて観光地にしかないの。」

「ここから、観光に来たんじゃないからな？」

「けどよく、ここって観光都市じゃねえの？」

「いいから、ついて来い。おい、その船頭！ ゴンドラを頼む！ エア・サプレーナ

島まで行きたい。」

シーザーが水辺に停泊していた小舟の船頭に頼んだ。

すると船頭は、ゆっくりとこちらを向いた。

帽子を被っており、顔にお面を付けていた。

「い…石仮面!？」

「いや、あれは、ヴェネチアの名産、お祭り用の舞踏仮面だが!」

「左側のデカイ男! 貴様の顔が気に食わん! 今から痛めツケテヤル!」

すると、仮面を付けている船頭がそう言った。

「うお! なんだなんだ! 敵か!？」

「でかい男つてのは、俺のことかあゝゝ? いきなり何言い出すのん? 頭パープ

リンなのか?」

すると船頭は、オールを水に浮かせた。

そして、まったく重力を感じさせない動きで細いオールの上につま先だけで立つて

見せた。

「んな!？」

「こ、これつて…。」

スタンドじゃないよね? つと仗助とミナミは、顔を見合わせた。

そうこうしていると、謎の船頭は、足だけで器用に水の上でオールを回し、そして、

ジョセフをオールで殴って水に落とそうとした。

「ジョセフさん!」

「なにしやがる!? わけが分からん……。いきなり殴られたからには、ぶつとぼしてくれるぜ!」

「……………波紋で水を弾き、水面に立つことぐらいは、出来るのか。」

すると、船頭が帽子と仮面を外した。

パサツと美しい黒髪が現れ、そしてその下の顔は……………、20代後半ぐらいの美しい女性だった。

「あ! 先生!」

「えっ!」

思わず、シーザーと、先生と呼ばれた女性を二度見してしまったミナミと仗助だった。

「つ…女あ? てめくく、いきなりオールで痛めつけられては許せねえぜ! こんな場合、俺は……………、女だろうが容赦はしない!」

「やめろ、ジョジョ。その人が俺の先生だ。」

「先生だとくく?」

「ねえ…どう思う?」

「いや…、勝てねえんじやね?」

ミナミが仗助とそんな話をしていると、勝負がついたのか、ジョセフが何か謎の鋼

で出来たマスクを付けられてしまっていた。

「ジョセフ・ジョースター。あなたは、1ヶ月間、その『呼吸法』矯正マスクをつけて生活しなくてはならない。」

「ぐっ！ ググググ！ 息が…。」

シーザーの先生曰わく、ジョセフに付けられたマスクは、呼吸のリズムを一定にしないと酸欠になってしまうマスクで、早い話が、このマスクを付けた状態で、100キロメートル走っても、そのマスクが平気にならないといけないそうだ。

つまり、波紋の呼吸を常にしていないと、酸欠死まっしぐらな、超きつついことらしい。

そして、シーザーの先生は、言う。

ジョセフの命を救うための波紋法を教えるのではなく、奴ら…柱の男達を倒せる戦士を作るために教えるのだと。

「あらためて…。」

「えっ?」

ぼう然と成り行きを見ていることしか出来なかつたミナミと仗助に、シーザーの先生が向き直った。

「初めまして。私は、リサリサ。スピードワゴンさんから、あなた達のは伝え聞い

ているわ。よろしくね。」

「あ、…どうも、東方ミナミです。」

「東方、仗助っす。」

二人は、慌てつつお辞儀した。

「あら？ ミナミ…あなた…。」

「へっ？ わっ。」

急に肩を触れられ、ミナミはびっくりした。

「……なるほど。」

「どうしました、先生？ ミナミがなにか？」

「この子…、生まれつきね。波紋の呼吸を少しだけどしているわ。」

「なんだって〜!？」

「わ、私が…?？」

「気づいていないのなら仕方ないことよ。それだけ微弱だと、せいぜい少しだけの静電気程度にしかならないでしょう。」

「あ、そういや、姉ちゃんって、昔っからすぐ、ビリっ！ ってなるよな。」

「ほくん？ じゃあ、俺と同じかあ。さっすが、俺の…、ブフツ！」

「こら、ジヨジヨ！ あんまり言いふらさない方がいいぞ！」

「なんでだよ〜?」

「この時代は、ミナミと仗助にとつちや、過去の時代だ。もし過去に何かあれば、未来に響く可能性があるぞ?」

「!」

「なにか?」

「えっ! いや、なんでもないっす。ハハハハ!」

「なんでもないですよ、先生。」

「…そう。」

リサリサは、深くは聞かなかった。

「では、あらためて、シーザー、そして、ジョジョ、ミナミ、仗助。ようこそ、ヴェネチアへ。」

「…:…なんだろう…:、すごい人なんだろうね。」

「ああ…:、なんか…:よく分かんねえけど…:。」

ミナミと仗助は、リサリサから放たれるオーラののようなモノに圧倒される気分だった。

そして、一行はリサリサの案内で船に乗り、エア・サプレーナ島という場所へ向かった。

「私達はこれから、あの島へ渡ります。あの島全体が私の屋敷です。」

「うわあ……」

ヴェネチアの観光都市感が無くなり、一転して暗く神秘的な巨大な屋敷が海に浮いているようだった。

その不気味さに、思わずミナミは、声を漏らした。

「死の覚悟とかが必要とか言ってたけどよお……、これからどんな修行が……」

島……というよりは、巨大な屋敷に上陸してから、ジョセフが不安そうに声を漏らす。

「修行のプロローグは……、名付けて『地獄昇柱（ヘルライム・ピラー）』！」

「なんですって！ 『地獄昇柱』!?!」

「なんだそりゃ?」

「せ……先生！ いきなり『地獄昇柱』に挑まねばならないのですか？ 俺は、これをも度も挑んだことが無い……。多くの修行者が死んでいったという、『地獄昇柱』に!!」

「いい!?!」

「おいおいおいおい……! シャレになってねえぞ?!」

シーザーの様子から、ただ事じゃないと察したミナミと仗助。

「ミナミ、仗助、波紋使いではない、あなた達は、残りなさい。」

「はい？」

「んだよ、そりゃ〜〜！」

「この『地獄昇柱』に挑むのは…、シーザー、そしてジョジョ。あなた達ふたりです。」

「へっ？ うぎゃー！」

「先生!？」

屋敷に入って早々の塔の中への扉の向こうに、ジョセフとシーザーがリサリサに蹴り落とされたのだった。

「ジョセフさ〜〜ん！ シーザーさ〜〜ん！」

「よ、容赦がねえ…！」

「素手で、この柱の頂上に登ってきなさい。出口はそこしかないわ。登れぬ場合は、死ぬまで出られない。」

リサリサが遙か下に落ちた二人に、容赦なく言った。

「では、ミナミ、仗助、あなた達は、メツシーナとロギンズに案内させるわ。二人についていきなさい。」

「えっ!？」

「ふ、二人は…?」

「ここを上がってこられなければ、この島で修行をする資格はないわ。あなた達は、あ

なた達のことをしなければなりません。特に仗助、あなたの中の毒の指輪を取り除くには。」

「うっ！」

「……が、がんばって……ジョセフさん……シーザーさん……。」

リサリサの容赦の無さに、二人は知らず知らず震え上がったのだった。

ミナミと仗助は、気が気じゃない状態で、屋敷を案内された。

そして、案内された室内で、椅子に座るよう言われ、綺麗なアンティークのテーブルとセツトの椅子に座った。

そこへ、二人を案内したメツシーナとロギンズが、お茶とお菓子を持ってきた。

ジョセフとシーザーが心配な二人は、とてもじゃないがくつろげる状態じゃなかった。

すると、そこへリサリサがやってきた。

「あ……あの……。」

「話をしましょう。」

「……はい。」

二人のことを聞こうとしたが、有無を言わさぬようなりサリサの迫力に負け、二人

は姿勢を正した。

「あなた達は…、普通の人にはない、力を持っていると伝え聞いているわ。それは、本当？」

「……はい。」

「そうです…。」

「二つ目。あなた達は、未来から来たと聞いているわ。それは、本当？」

「はい…。」

「そうつす…。たぶん、数十年後つす。」

「三つ目……、信じがたいことだけれど、ジョジョの娘と息子とというのは本当？」

「……は、…はい…。」

「…そ、そうです…。」

そう力無く返事をする、シーンとなった。

やっべえ…、この空気どうする？ いや、ムリムリ。つとミナミと仗助はアイコンタクト。

「そう……。そして、もう一つ。あなた達は、口は硬い方？」

「えっ？」

「これから話す秘密を喋らないと誓える？」

「は、はあ…。えつと…、内容にもよりますが…」

「俺もつす。」

「そう。」

するとリサリサが椅子から立ち上がった。

何かされる!? と思わず身構えた二人に……。

フワツ…とリサリサが二人を同時に抱きしめた。

「こんな形でごめんなさい。そして初めまして…、ジョジョの母として、歓迎するわ。」

「えつ…?」

リサリサに抱きしめられている二人は、固まった。

なんて言った?

今、この人なんて言った?

はは…? 母?

誰の? ジョジョ(ジョセフ)の?

ええ——————!?

つと叫びそうになって、二人は咄嗟に口を自分の手で塞いだ。

「良い子ね。まだ知られるわけにはいかないのよ。無事に修行を終わらせなければな

らないのだから。」

「えっ？ えっ？ ……つてことは…、で、でも…どう見ても…。」

「あの、失礼ですが…、お、おとおお、お幾つですか？」

「波紋の達人の宿命ともいえるもの…、波紋の呼吸は、常人よりも老いる時間が遅いのです。」

「でもよお…、じじい…、ジョースターさんつて、かなり歳食つてたよな？」

「うん…。」

「波紋の呼吸を続けてこそその若さなのです。止めれば忽ち、常人と同じ速度に戻ることでしよう。」

「あ、なるほど…。」

「そっか、ジョースターさんは、波紋の呼吸をしてなかったのかあ…。」

「しかし、老いは必ず訪れます。そのために、道を違えてしまった波紋使いもいました。」

「えっ？」

「あの二人にも、そのような道を辿らせぬよう、修行をもって、心身共に叩き込みます！」

「た、たった、30日で、あの怪物みたいな三人の男に勝てるんですか？」

「それでも、やらなければならぬ。あなた達もジョジョも、時間がない！」
「うっ……」

そうだ、自分達には時間が無いのだ。

仗助とジョセフの中の指輪が溶け出し、毒が回るまで、今日までですでに3日以上
の時間が経過している。

残り時間は、30日！

改めてそれを認識した仗助とミナミは、青ざめた。

特にミナミが、ガタガタと震え出す。

「姉ちゃん、しつかり！」

「ご、ごめん……、仗助……、震えが……止まらない……。怖いよ……、あんたを失うかも知れな
いって思ったら……！」

「姉ちゃん……」

ガタガタと震え、涙を浮かべるミナミを、仗助が抱きしめた。

「だいじょうぶだ。俺は絶対死なねえから。」

「………本当？」

「俺、悪運だけは強いんだぜ？ 知ってっただろ？」

「………かもね。」

「俺だつてやれることは、やるぜ。誰かが言つてなかつたか？ スタンドの成長は、精神力にあるつて。」

「……そつか…、精神力が高まれば、自然と仗助の力も高まるかもしれない。」

「そうすりや、単に直すだけじゃなく、それ以上のことだつてできつかもしれないしよ。なあ、リサリサさん！ 波紋の修行つて、精神統一とかつてのもありますか？」

「あるわ。けれど、あなた達には、おそらくは必要ありません。」

「えっ？ なんで？」

「あなた達がすべきことは……、これから始まる修行の合間の、ジョジョとシーザーの話し相手です。」

「あれ？ それつて、修行中のケアですか？」

「そうとも、言います。」

「だつてさ。」

「えー……？」

「それに…、仗助。あなたの力はあらゆるモノを直す力だと漏れ聞いています。その力をもつてすれば、いかなる修行で怪我をし、死に瀕しようとも、立たせることができますので、よろしく願いますわ。」

「ひっ!？」

それは、つまり、あの二人に対して、殺す寸前まで修行させて、死の寸前から生き返る体験をさせられることを繰り返すような、凄まじいことをさせるということだ。

そして、自分達は、その地獄絵図を見なければならぬということ……。仗助に至っては、その力で二人を強制的に治療しなければならぬのだ。

「怖いよ～～～！」

「怖えよ～～～！」

わーん！つと、二人は、抱き合って震え上がった。

「ですが、まずは、『地獄昇柱』をクリアしなければ、意味がありません。それまで、英気を養いなさい。」

「ひーーーーー！」

「休める気がしねーーーーー！」

その後、ジョセフとシーザーが『地獄昇柱』から這い上がってきたのは、約3日後だった。

修行中のケア？

「仗助。」

「……へ〜い。」

仗助にお呼びがかかり、仗助はヨロヨロと力無く、倒れているジョセフとシーザーに近寄り、クレイジー・ダイヤモンドを使った。

ハッ！と目を覚ます二人は、自分の体をペタペタと触って確認していた。

「あの…、正気ですよね？」

「み、ミナミちや~~~~~~~~ん!!」

「うわっ！」

「もうやだああああ!!」

「ジョセフさん…。」

もう何度目かになる泣きつきに、ミナミも仗助も、止めはしなかった。

シーザーは、ガタガタガクガクと自分の体を抱いて震え上がっているし…。

修行、数日目だが、あまりのキツさと、死ぬ寸前から正常状態に戻されることを繰

り返される、ある種の拷問に、心が折れかけているようだった。

「あの…リサリサさん…。」

「なにかしら？」

「そろそろ、限界が見えてる気がしてならないんですけど…？ さすがの俺も壊れた精神までは直せないですよ？」

「…：…：そうね。小休止を許しましょう。」

「小休止…?!？」

「冗談です。」

冗談に聞こえなかった…！…つと、ミナミと仗助は戦慄した。

「時間が無いことは分かっているわね？」

「だ…：…：だすが…：…：。ありがと、ミナミ、仗助…。」

「さ…：サンキュー…。」

ガチ泣きしている、ジョセフとシーザーであった。

こりや重傷だ…つと、ミナミと仗助は思った。

休憩は許されたが、ジョセフの呼吸矯正マスクは、外してもらえなかった。

「あの、ジョセフさん…。」

「んんんんん？」

「そろそろ離してください…。」

「やだ。」

ミナミは、椅子に座った状態のジヨセフに後ろから抱きしめられた状態だった。

「はあゝゝゝ、癒される…。」

「もう…。」

「ジヨセフさん…、いい加減にしないと、俺、殴っちゃいますよ？」

「おう？ 未来の父ちゃん俺とやり合おうってのか、仗助？」

「姉ちゃんは人形やぬいぐるみじゃねえんだ！ いい加減にしろよ！」

「あーあー、分かりやしたよ。」

「わっ。」

急に離され、ミナミは、よろつき、仗助が助けた。

「そういえば、シーザーさんは？」

「アイツなら外で黄昏れてんぞ。飛び降りしなきやいいけどな。」

「碌でもないこといわないでくださいつすよ。」

「んん、なんかアツプルパイが食べたくなつたな。作ろうかな？」

「なんでこの流れでそうなるわけ？ 姉ちゃん、空気読めねえよな…。」

「いいじゃん。別に。食べたくない？」

「いる。」

「じゃあ、キッチン借りに行ってくる。」

「うんま〜いの、作ってくれよ〜？」

「私が食べたいの。」

ミナミは、キッチンに向かった。

そして、ロギンズとメツシーナに頼んでキッチンを借り、アップルパイと、ついでにベリーでベリーのマフィンを作った。

焼きたてを籠に入れて持って行く途中。

シーザーがいた。

「あつ。」

「……ミナミか。どうした、それ？」

「つ…作ったんです。」

「ふ〜ん、料理も嗜むのか。良い嫁さんになれるぜ？」

シーザーが近づくと、ミナミは、一歩下がった。

それを見たシーザーは、顔をしかめた。

「なあ…。」

「あ……。」

「俺のこと…嫌いかな？」

「ここ数日間で、ミナミから避けられていることに、シーザーが気づかぬはずがなかった。」

「えつと…その…。」

「俺、君になにかしたか？」

「いえ、シーザーさんが悪いんじゃないんです。私が悪いんですから…。」

「どういうことだ？」

「……あの…、シーザーさん…みたいなタイプに、メチャクチャねちっこくナンパされたせいで、苦手になっちゃって…。」

「…あー。」

シーザーは納得した。

シーザー自身が嫌いなのではなく、シーザーに似たタイプの男にしつこく言い寄られたトラウマがあるせいだと分かったからだ。

確かに、ミナミほどの容姿では、言い寄る男も多いだろう。

「それは、別にミナミのせいじゃねえだろ？」

「でも…。」

「それより、ひとつもらうぜ。」

「あっ。」

ベリーのマフィンをひとつ取り上げ、シーザーは焼きたてのソレを食べた。

「うん。美味しい。料理上手だな。」

「どうも…。」

「トラウマほじくらないよう、できる限り触らないようにするから、あんまり気を張りすぎなくていいからな。」

「えっ? あ…。」

そう言い残してシーザーは、手を振りながら去って行った。

ミナミは、思わず伸ばしかけた手を止め、しょんぼりした。

半日後、修行は再開された。

「てめえは、…お、女じゃねえ! 鬼だ、デビルだ!」

「吠えるなら、吠えるだけ吠えていなさい。」

「も…もう勘弁してください…先生…。」

「仗助。出番よ。」

「すみません！ ジョセフさん、シーザーさん！」

「いやだああああああああああああああああああ！！」

仗助はリサリサに逆らえず、涙ぐみながら、悲鳴を上げる二人を治療した。

スーパーエイジャと、エシディシ

指輪溶解まで、7日！

波紋の修行を見ていた分かったことだが、呼吸さえ鍛えれば、自然にあらゆる身体能力が強化されるようだ。

ジョフセフの祖父であるジョナサン・ジョースターがかつて、壮絶な修行の末に波紋を会得したシーザーの祖父であるツェペリ師によって、波紋の素質を開花させた影響で、その孫にあたるジョセフに波紋は受け継がれ、生まれつきの波紋使いが誕生するに至った。

これまでただの静電気程度のしか思っていなかったミナミ体質も、父・ジョセフから受け継いだ波紋の素養だったのだ。

まあ…、もつとも、ミナミの波紋は、ジョセフほど強くはなく、そもそも4歳の時にソレを越えるスタンド（幽波紋）に目覚めたため、使う機会すらなく、静電気程度にとどまっている。リサリサ曰わく、鍛えても上達しないとのことだ。見えない力に素質たる力が持つて行かれているようだということだった。

最初の頃こそ、心が折れかけていたジョセフとシーザーであるが、さすがに怪我しなけりや死にそんなことにはならないと覚えたようで、メキメキ強くなった。

おかげで仗助の出勤回数は減り、残り7日に迫った頃には……。

「見違えたとは、このことだろうね……。」

「うん……。」

見違えるほどたくましくなった……、ジョセフとシーザー。

元々たくましかった体躯は、より大きくなったように見え、頻繁に仗助に治して貰ったから傷跡こそない。

「惚れ直したかい？ ミナミい？」

「それは別。」

「つたく、鍛えても性格だけはちつとも変わりやしないつすね。」

「うっせえな。これは俺の元々なの。」

「そういえば、リサリサさんは？」

「ありや、どっか行つたな？ んん？！」

周りを見ると、ちょうどナンパでもされているのか、変な男にリサリサが絡まれて

いた。

「しゃくねくなく、助けてくるぜ。」

「いつてらっしやーい。」

ジョセフがリサリサを助けに行った。

そして、リサリサを助けた後、リサリサに、そんな真つ赤な、でかい宝石なんて身につけているからスリになんか狙われるんだと怒っていた。

しかし、ふと、ジョセフは、思い返す。

真つ赤な宝石…、赤…、赤石（せきせき）。

カーズ達は言っていた。

我々の目的は、赤石。エイジャの…赤石。

エイジャの赤石！

「気がついたようね。そう、これが『エイジャの赤石』。」

「おいおいおいおい！ そいつをあんなたが持ってたのかよ！」

「そういえば、アイツら、そんなこと言ってたっけ？」

「そうだっけ？」

「お前ら、記憶力ねくなく。」

「うるさいですね。あなたが異常なんですよ、ジョセフさん。」

「俺の記憶力すげーだろ？ へへへ。」

「すぐ調子に乗る…。」

「島に戻るまでの船で説明します。エイジャの赤石については。」

そして、語られたのは、カーズ、ワムウ、エシデイシのことを交えたエイジャの赤石と石仮面についての言い伝え。

カーズ達は、5千年以上前に現れたとされる謎の種族。

彼らが作った石仮面は、彼らが太陽を克服するために作り上げた人体実験用のサンブルに過ぎず、吸血鬼や屍人を作ることが出来ても、不完全なのだそうだ。

そこで必要となるのが、エイジャの赤石。

自然界にごくわずかしかないとされる、エイジャという名の純度の高い宝石で、光を増幅する力があり、自然が作り出す奇跡のパワーが得られるようだ。

一点の曇りもない、大きなエイジャ。それがスーパーエイジャ。

それこそが、カーズ達が太陽を克服するために作り上げた石仮面を完全に最後のピースなのだという。

「って、ハハとは……。」

「ええ。その通り、私が持つ、これこそが、スーパーエイジャ。」

するとリサリサが太陽にスーパーエイジャを掲げた。すると、光が収束され、凄まじいレーザーのようなエネルギーが、発射され、船の一部を爆破した。

「ちよつと太陽に掲げただけで、これえ!？」

「確かに、奇跡のパワーって言われりやそうか!」

「……ぶつ壊せ。」

「ジョセフさん?」

「その赤石。ぶつ壊せよ。破壊しちゃえばよお、奴ら、泣いて悔しがるぜ?」

「それは、言い伝えでできません。」

「なあに?」

「エイジャの赤石を破壊したなら、なおのこと、奴ら三人を倒せない。倒せなくなると言い伝えがあります。」

「倒せなくなる?」

「どうしてつすか?」

「分かりません……。しかし、私は自分の使命を守り通さねばなりません。」

リサリサは、そういうと、景色に目を向けた。

その横顔からは強い……あまりにも重い使命感を抱えた戦士としての覚悟が見えた

ような気がした。

「ジョジョ、シーザー。あなた達には、島に戻ったら、最終試練を受けてもらいます。」

「最終試練!?!」

そして島に戻ると、リサリサは、最終試練の内容を二人に伝えた。

それは、これまで二人の師範代として鍛えてきた、メツシーナとロギンズをそれぞれが倒すこと。

まあようするに、師匠を超えてみるということだ。

「で、俺らは、お留守番か…。」

「ま、しょうがないよ。一対一の戦いなんだから。」

「けど、見ちゃダメとは言われてねえし、姉ちゃん、ヒマだし見てこねえ?」

「双眼鏡持つてこう。気が散らないように。」

「どっち見に行こうか?」

「ここから近くだと…、ジョセフさんかな?」

「行こうぜ、行こ!」

「待つてつてば。」

そして二人は、リサリサの屋敷でもある島の少し離れにある海の上に渡された道を進み、ジョセフがロギンズと戦う場所に向かった。

時刻は、夜明け前という眠い時間帯だが、そういう時間こそ油断するなどということだろうと見て二人は眠気を押しして来た。

すると。

「おりよお？ ミナミに仗助じゃねえか。」

「あれ？ もう終わったんですか？」

「いいや。いつまで経つてもロギンズ師範代が来ねえから気配がした方に来てみたんだよ。そしたらお前らがいた。で？ 見物かあ？」

「ま、そうっすね。かつこわりーとこ見せないくださいっすよ。」

「かー、言うね、この悪息子が。」

「……!!」

「どうした？」

「どうしたんだよ、姉ちゃん？」

「あ、あ、あああ、ああああ！」

「どうした!？」

「あれ、あれえ!!」

ミナミが青ざめて指差す先を二人が見る。

そこには、ひとりの奇抜な格好の大男が、片足で、ロギンズを突き刺している光景

だった。

「ま……さか……。」

「柱の男!? て、てめえは…、エシデイシかあ!?!」

「この島は…、人の住むようなところではないらしい。面白そうな闘技場のようではあるが…。」

ジョセフらの言葉に答えず、エシデイシは、ロギンズは、足から落とし周りを見回した。

「すると、となりの島に…、エイジャの赤石を持つ女がいるのか…。」

「なんてことを…。」

ミナミは、死んだロギンズの目をソツと閉じさせて俯いた。

「おい! ロギンズの死体から離れろ!」

「!」

すると、ロギンズの死体がグツグツと煮えだした。

お湯のように沸騰した血液が飛び散る。

「ふふふ…、ソレに気づくとは、その観察眼は変わらないようだな? まあ、俺からしたら、ほんの少しの間ではあつたが。」

「…それがてめえの、技かあ? ワムウの奴が、風なら、てめえのは…。」

「我が流法（モード）は、炎！ 熱を操る、流法（モード）！」

「下がってな、ミナミ、仗助。コイツは俺が相手するぜ。そいでよお、エシディシ！ てめえが持つ解毒薬はいただくぜえ！」

「そうだったな、お前には俺が死の結婚指輪を仕込んでおいたのだ。さて、本当に30日もしないうちにこの俺を倒せるようになったのかな、ジョジョ？」

エシディシが飛び、針の山がある闘技場へ足を突き刺しながら立った。

ジョセフは、波紋を足の裏に流し、そしてとんでもないバランス感覚で針の上に立つ。

「来い、ジョジョ！ 約束通り、俺を楽しませてみろ！」

「ケツ！ そんなこと言ってられるのも今のうちだぜ！」

突き出されたエシディシの掌の真ん中に、ジョセフが人差し指を突き立てた。

20数日で鍛えに鍛え抜いた波紋により、エシディシの掌が貫かれた。

「ぬうう!? これは…、ほう、想像以上の成長ぶりだな。」

「そりや、どうも。」

「だが！ 波紋の戦士など、2千年前に飽きるほど殺し、喰らってきたのよお!! もう飽き飽きしてる！」

「うがあ〜！」

「ジョセフさん！」

エシデイシが貫かれた手をそのまま握り込み、ジョセフの手をメキメキと握りつぶす。

「なんつって。」

「むっ!?!」

するとジョセフは、エシデイシの手を鉄棒の棒のように支柱にして、そして、もう片手に糸の輪を手にしてエシデイシの手首にかけた。

「糸には、波紋が流れやすいように樹脂がたっぷり染みこませてある！　ほんとは、首に巻き付けたかったが、さすがにその隙はねえか……。」

「いつの間に糸を張っていたのだ？　その動きや仕草は……、はっ!?!」

エシデイシは、気づく、糸の先がグツグツと煮えているロギンズの死体の指に引つかかっていたことに。

「ぬうう！　あれは、先ほどすでに、死体の手に結んで引つ張っておったのか！」

「俺の作戦としては、ちよいと残酷趣味だが、師範代と協力してあげた、ダメージー（ワン）つってところか、エシデイシ!!」

そして、波紋が流された糸が、エシデイシの腕を切断した。

「師範代……、あんたのしごきに対して、礼を言うぜ。グレッツチエー！　ロギンズ！」

「すっげえ……！」

「お父さんって、ここまで狡猾だったんだね……。」

針の山に行けない二人は、遠目に見ている、その戦いぶりに圧倒された。

「俺は、学校をサボっていたがよお、エリナおばあちゃんから教わった歴史だけは得意なのよ。2500年前の中国の兵法書に「孫子」ってのがあって、こう書かれている。『勝利というのは、戦う前に全て、すでに決定されている。』」

つまりつと、ジョセフは言う。

「戦う前に敵に気づかれないよう、色々な作戦を練つとくのさあ……！ おめーは、長生きしとるけど、策を考える頭が俺より馬鹿つて事だなあ……！ ギャハハハハハハ！！ この……！」

つと、ジョセフは笑い、針の山の針に刺さった切断されたエシディシの手を蹴って回した。その際に波紋を流したので、エシディシの手は、蒸発して骨になった。

「性格、悪っ！」

「ここ十数日で分かってたはずなんだけどなあ……。」

つと、ミナミと仗助はジョセフの性格の悪さに呆れた。

「うぬううう！ 貴様ああああ!!」

「おっ！ 怒るか？ 怒ったか？ どんどん怒りやがれ！ 俺はもつと頭にきてるん

だ！ 心臓に埋め込まれた毒の指輪のおかげで、この3週間、夜もぐっすり眠れねー！！
「う、ううう、…ううううう！！」

「ん？」

「なんか、変だよ…？」

「泣いてる？」

するとエシデイシが、ボロボロと顔を歪めて泣き出した。

そりやもう盛大に。気持ちの悪いぐらい。

「なんだ？ いったい…泣いてるのか？ 血管がビクビクで怒ってくると思ったが

…、このエシデイシの野郎、予想外！」

「なんかおかしいよ！ 油断しないで！」

「分かっているっての！ し、仕方ねえ！ トドメを刺すぜ！」

そう言つて、不気味がりながらも背中を向けて大泣きしているエシデイシにトドメを刺そうとジョセフが動こうとしたときだった。

「フ~~~~、スツとした。」

「なに!？」

「俺は、カーズやワムウに比べて、ちと、荒っぽい性格だな。激昂してとち狂いそうになると泣きわめいて、頭を冷やして冷静にすることになっているのだ。」

「……な、なるほど。」

「り、理に適ってるっちゃ、敵ってるか？」

「あつ！」

「どうした、姉ちゃ…、つて、ああ！ ロギンズさんの腕を！」

「フン！ ちよいと細めだが、そのうち一体化して、もとの太さになるだろう。ジョジョ。先ほど、「孫子」とかを引き合いに出したな？ それなら俺も知っている。その昔中国に行ったこともあるのでな。『兵は詭道なり』！ 戦いとは、詭道（あざむくこと）。敵を怒らせて、心を動揺させるのは、その力に隙が生じる。貴様がやろうとしているのは、それだ。その手には乗らん。しかし、ジョジョ…、貴様の成長には、驚愕している。貴様の波紋を讚美している！ 久しく好敵手がなかったのな。」

「な…、なんか…ヤバイ流れ？」

「くっそ…射程外だぜ…！」

クレイジー・ダイヤモンドの射程距離は、せいぜい、1〜2メートル程度だ。それ以上だと届かない。（※ただし、仗助がプツンしている時に限り、ちよつとだけ違う）「私のブルー・ブルー・ローズなら、この島と隣の島まで覆えるけど…。」

制御ができないのだ。出てきたとしても、間違いなく、ジョセフをも巻き込む。

「何も出来ないの…？ こんな目の前で戦いが起こっているの…、何も出来ないなん

て！」

「落ち着け姉ちゃん！ あの野郎のテンポに乗せられたら終わりだ！」

「ジョースケ。お前だけは残しておく。ワムウがどうしてもお前を殺すと言って聞かないのでな。」

「っー」

こちらが何も出来ないのを見越して、エシデイシが挑発するように言ってくる。嫌な汗をかく、ミナミと仗助。そしてジョセフ。

ジョセフは、内心焦っていた。

つというの、これまで戦ってきた相手とは精神の在り方が違うからだ。

これまでジョセフは、相手の感情を読み取り、心を利用してそこから策に嵌めてきた。だが、エシデイシは、自らの精神の在り方を理解して、それを落ち着かせるやり方を知っており、これまでジョセフが相手をしてきた相手とはまったく異なった。

「うおおおおおおお！ クラツカーヴォレイ！！」

ワムウとの戦いで披露した技の、さらに改良版を放つジョセフ。

鉄球のついたヒモが自在に操られ、波紋を流しながらエシデイシに向けられた。

もちろんこのクラツカーヴォレイも、波紋伝導率を上げるため樹脂をたつぷりと仕込まれている。ハッキリ言って、ワムウとの初戦とは比べものにならない威力となって

いた。

だが…。

スツと出したエシディシの手が真ん中で二つに割れた。自らの意思で割れたのだ。

そこをクラツカーヴォレイが通過した。

それを見たジョセフは、焦りの汗をかく。

「やはり恐怖したな。心の動揺で、焦りができ…、安易な方法で攻撃してきたのは、貴様の方だったな、ジョジョ。」

そしてエシディシの手の爪が割れ、そこから、血管が触手のように出てきた。

「貴様にも血管針（けつかんしん）を突き刺して、グツグツのシチューにしてやる！
くらつてくたばれ、『怪炎王（かいえんのう）』の流法（モード）!!」

そして、伸びてきた鋭い血管が、ジョセフの顔に命中し、ジョセフが吹っ飛んでいった。

「ジョセフさん！」

「……ちい！ 味な方法で躲しやがったか。」

吹っ飛んだジョセフは、空中で体制を整え、針山の上に再び立った。

その波紋マスクがジリジリと焦っていた。

どうやら波紋マスクで防いだらしい。

ジョセフは、針を利用して火がついたマスクを強引に破壊した。

「なんて、血液だ！ くっそ、俺のセクシーな唇が焦げちまったじゃねえか！」

ジョセフは、ギツとエシデイシを睨んだ。

「……フツ。ジョジョ？ お前……今、減らず口をたたくフリをして、実は心の中で作戦を考えていただろう？ ほくら、青ざめている。凶星だろう？ ずばり、当たってしまったか？ なぁー……！！！」

エシデイシは、そう言つて笑う。

「やべえ……、圧倒的だ……、圧倒的な生物だぜ、奴はよお！」

「こんな生き物が……いたなんて……！！」

二人は、針山の闘技場の端から、エシデイシの脅威に震えた。

エシディシ その2

エシディシが、ニヤニヤ笑いながら、ズブズブと器用な体勢……というか、人間じゃない動きで針の山に自らの体を突き刺していく。

すると、針で穴だらけになった体を抜き、針から跳躍する。

「怪炎大車獄（かいえんだいしやく）の流法（モード）ー！」

体に空いた穴という穴から、血管を出し、四方八方からジョセフに血管の先を向けた。

ジョセフは、その血管から軽やかな身のこなしで避けていく。

すると……、シウルシウルとジョセフが身につけていたニット帽の毛糸が抜けてい

く。ジョセフが逃げていくと同時に、シウルシウルと毛糸が針に。

「ぬっ?」

「へへへん、やつと気づいたか? どうして俺の帽子がちっちゃくなっているのかに

な! おめーは『結界』の中にいる! 波紋ロープだぜ!」

「……ふっ。」

「おい? なにがおかしい? お前なんか……。」

「気づかないと思つたか？ お前は次に、『消してやるぜ、そのニヤついた顔を！』つと言う。」

「消してやるぜ、そのニヤついた顔を！ …ハッ！ てめ、俺の十八番を！」

「ジョジョ。よくみろ、結界を張っているのは、俺の方だとな。」

「ああ！ 足から血管が！」

「毛糸が切れる！」

「貴様の作戦など、すでに見切っているぜー！！！」

凄まじい数の血管針を出しながら、エシデイシは笑う。

避けきれなかった血管が、ジョセフの体の表面に刺さる。刺さったところから、ブスブスとジュウジュウと熱を持つエシデイシの血液が煙を出す。

「ジョジョ。貴様を殺した後は、そこのお前に似た娘の方を殺すでしょう。どうにもあの時のことが気になって仕方がないのでな。」

「ああ…、なんか、血みたいな色の根っこみたいなもんがいつぱいあつたな。あれか？」

「どうも、あれがあそこにいる娘と関係があると思えて仕方がないのだ。どういう原理かは知らんが…。ジョースケのような力ではないのか？」

「！」

「どうやら、凶星のようだな?」

ミナミの反応を見たエシディシがニヤリと笑う。

「あの時は、つついっい俺達に似合わずビビってしまったが、カーズへの土産として、スーパーエイジャとあの娘の首でも持ち帰るとしよう。」

「ああん? てめえ……、俺の娘にそんなことさせると思ってたのかあ?」

「お前の? ジョジョ、お前の見た目からすると、あれだけ大きな子供がいるとは思えんが?」

「色々とおんだよ。」

「だが……しかし……、お前も敗北はどうあがいても覆せまい。俺の策は、すでにお前の策を越えている。」

「……フフフン。」

「? 貴様……なにがおかしい? 生死を俺に掴まれている、こんな時に笑みを! 恐怖のあまり、気でも狂ったか!」

「違う違う。やつぱ、お前さあ……、寝ぼけてるぜ。」

「?」

「こうやって目を閉じると見えるのよ。『勝利』がな。その笑いだぜ。エシディシ……、おめーの『敗因』は、やはり2千年間、グツスリ眠りこけていたことだなあ……。」

「敗因！ だと…。」

「おや〜？ 分からないかな？ おめーらが2千年間眠りこけている間に人間ってのは、コツコツと少しずつ進歩していたわけだが…、つまらないことだが、18世紀から19世紀にかけて『手品』や『奇跡』もずいぶんとエンターテインメントとして発達したんだ。俺さあ、ひじょーに、だましの『手品』が好きなのよん!!」

「あぁー…！」

「毛糸が！」

「仗助が直したわけじゃないよね？」

「やってない。」

「波紋、ロープマジックだぜ！」

「ば、馬鹿な！ 切断したはずの糸が…。」

ジョセフが毛糸の先端を引つ張ると、切断されたかに思われた毛糸が現れ、エシデイシの体を絡み取った。

「貴様は、次に言う！ 『貧弱な波紋より、先に俺に血管針をブチ込んでくれる』 っつな！」

「貧弱な波紋より、先に俺の血管針をブチ込んでくれる!! ハッ！」

「波紋のビート!!」

波紋伝導率100パーセントになるよう仕込みがされた毛糸に、この短期間で鍛えに鍛え抜いたジョセフの波紋が流れる。

「RRRRRRRRUUUUUUUUUUUUUU!!」

エシディシの体に毛糸が食い込んでいく。

「おおおおお、俺が！ 俺が！ 俺が人間なんぞに！ 俺は、俺は！ 俺は偉大な生き物だ……、や、やられるなんて……!! よくも！ おのれええええええええええええ!!」
ブスブスと崩れていく頭部のままに、エシディシがジョセフに最後のあがきと襲いかかる。

そのエシディシに、最後のトドメだと、ジョセフが波紋を込めたパンチを喰らわした。

エシディシは、骨も残さず、蒸発していった。その際に凄まじいエネルギーが放出された。

「何千年も生き抜いた、こいつの生命力か……。去りやがれ、何万人もの人間を殺して得たそのパワーのほとばしりと共に！」

エシディシは、身につけていた衣装と、解毒薬が入った指輪を残して消えた。

「鼻につけたピアスつてのが、気になるが……。まあいいか。」

「早く早く！」

「すみません、ジョセフさん。助けられなくて…。」

「別にお前らの助けが無かったって勝てたもんね。けど、格好よかったろ?」

針山から戻って来たジョセフが、指輪を割り、中の薬を口にした。

「……どうですか?」

「……うーん。分かんねえ。でも、なんとなくだが、指輪が無くなったって感覚はあ
るような。」

「あとは……、ワムウ…。」

「任せときなつて。俺がちよいちよいつと倒して、奪つてやるからよ。」

「あーもう、すぐ調子に乗る。」

「いいじゃねえかよ。堅苦しいなあ。」

「……。」

「ん? 仗助?」

「あ、いや、なんでもない。」

一瞬ブーツとしたように見えた仗助の様子に、ミナミが不審に思ったが、仗助はな
んでもないと笑った。

「……ねえ、仗助。この間作つた“レーズン”のマフォン美味しかった?」

「ああ、美味かったぜ。」

「波紋疾走！」

「なっ!？」

仗助が答えた直後、ジョセフがチョップと共に波紋を流そうとしたため、仗助が凄まじい身体能力で避けて、距離をとった。

「ベリーだよ！ エシデイシ！」

『……………チツ。勘の良い娘だぜ。だが、ここで死ぬわけにはいかん！』

仗助に取り憑いたエシデイシの脳が、仗助の体を使って、屋敷の方へ移動した。

「仗助！」

「追うぞ！」

二人は、急いで屋敷へ向かった。

仗助は、間もなく見つけた。

屋敷の手前の扉のところで倒れていた。

「仗助！」

「だいじょうぶだ、息はあるぜ！ けど、エシデイシの野郎は…、体からすぐ出ていったみたいだな…！」

「キャア！」

「おい、スージーQ！」

「あなた誰え？」

「おい、俺の顔分かんねえのかよ！俺だよ、ジョジョ。ジョセフ・ジョースターだ！」

「えー。マスクないから気づかなかったわ。」

「なんてこと言いやがる！それより、変なモノ見なかったか？　こう、なんか、人間じゃないもの！」

「見なかったわ。」

「そうか…。それはそうと、リサリサ先生は？」

「入浴中よ。30分は出てこないわ。覗いちやダメよ？」

「誰が覗くか！　それどころじゃねえんだよ！　シーザー達にも伝えてくれ！　あと、ミナミは、仗助のこと頼む！」

「わ、分かったわ…。」

「早く！」

ジョセフは、走って行き、ミナミは、意識の無い仗助を介抱しつつ、スージーQは、シーザー達のところへ急いで行った。

ジョセフが走っていると曲がり角のところで、誰かとぶつかった。

「いってー！ー！」

「つ…、じよ、ジョジョ！ おまえ、なんでここに！ エシディシは!？」

「シーザーちゃんかよ！ それどころじゃねえんだ！ エシディシの野郎がまだ生きてて…。」

「どういうことだ？ 仗助とミナミは!？」

「アイツは大丈夫だ！ それより、エシディシが、リサリサのところに行く前に…。」

「ん？」

「シーザー?」

「あれ…あの根っこは…。」

シーザーが指差す先には、まるでこつちだと言わんばかりに、フリフリと振られている床から生えたブルー・ブルー・ローズがいた。

ジョセフとシーザーが向いたのを感じたのか、赤い根っこは、ピョコピョコと場所を変えて移動するように生える場所を変えた。

「あの先か…?」

「なに?」

「追うぜ!」

「おい！ 待て!」

ジョセフが赤い根っこ…、ミナミのスタンド、ブルー・ブルー・ローズを追いかけ

ていく。

そして、風呂場の扉の前に到着。

「おいおいおい…。覗きの趣味はねえっての…。」

そうは言いつつソワソワしているジョセフ。

ブルー・ブルー・ローズは、ここを見ると言わんばかりに、鍵穴の方を示している。

「でもしようがないよな〜？ そう導くんならよお…。へへへへ。」

そしてジョセフが鍵穴の中を覗き見る。

すると、リサリサの裸体の背中がちょうど見えた。

「うひょー！ ナーイス！」（小声）

そして、再び鍵穴を覗くと…。

そこには、スージーQの姿もあった。

「!？」

彼女は、シーザーにエシデイシのことを伝えさせに行かせたはずだ。なのに、反対側のココになぜいるつと、ジョセフは疑問に思った。

「まさか!？」

「おい、ジョジョ！ 何やってやがる!？」

「先生、入るぜ!」

「おいー！」

ジョセフは、シーザーの言葉を聞かず、風呂場の扉を蹴破った。

『クククク…！ ばあかめえ…、遅いわ…！』

スージーQに取り憑いたエシディシが、笑う。

「スージーQ？ エイジャの赤石をどこへ!?」

タオルで体をかくしたりサリサリサが言う。

『今出航した郵便船にエイジャの赤石を乗せたぜ！ てめーらがあの船を追うことは阻止してやる！ それと…、この女は…まだ半分生きている、完全にこのエシディシを殺すには、この女ごと殺さなければならぬぜー！ できるか？ できねーよなー！』

「それは…、どうかな？」

「ドラー…!!」

『グゲグゲ…!!』

スージーQの体を貫いたクレイジー・ダイヤモンドの拳が、エシディシの脳を掴んで引つ張り出した。

『グゲグゲ!!? そ、そうか…、お前がいたか…！ ジョースケエエエエ！』

「よっしや、そのまま引つ張り出せ！」

『だが、俺を完全に引つ張り出せば…、この小娘の心臓を止めるぜ!!』
「なっ!」

長い長い血管が、スージーQに依然張り付いていた。

『ヒヤハハハハ! どうやらジョースケ…お前の力は、それほど遠くまでには使えな
いらしいな! じゃなきや、ジョジョとの戦いでどうに使っていたはず! 俺の血管は
まだまだ伸ばせるぜ! 血管を切ってみろ! その瞬間に心臓は止まる! 残念だつ
たな! そして、この俺の最後の力で、小娘を爆発させる! てめえらを道ずれにして
なあ!!』

繋がっている血管からエシデイシの炎の血液が送られ、スージーQの体が煙を上げ
ながら崩れ始めた。

「く、くそお!」

「やむを得ません! 私が、やります!」

「いいえ! 俺が…!」

「ま、待て! 閃いたぜ! シーザー! 油柱で覚えた波紋の効果! あれだぜ!

あれ! 一か八か、やってみるしかねえ!!」

「……なるほど、あ、あれなら…、できるかもしれん。分かったぜ。ジョジョ、俺の呼
吸に合わせろ!」

「おうー！」

「なにをー！」

次の瞬間、ジョセフとシーザーが、スージーQの体に、同時に波紋を流した。

「俺が流したのは、弾ける『正』の波紋！」

「俺が流したのは、くつつく『負』の波紋！」

「これで…。」

「心臓はプラマイゼロだ!!」

『…………ぎ…………い…。』

スージーQがポロポロと涙を零し、やがて、スージーQにくつついていたすべての血管が剥がれた。

クレイジー・ダイヤモンドの手の中で、風呂場に入り込む太陽の光を浴び、エシディシの脳が血管と共に消滅していった。

「や、やった…。」

「なんて野郎だ…、むかつくぜ。女の体に取り憑くなんて醜いことをしやがって。」

「いや、違うぜシーザー。そいつは逆だ。俺はコイツと戦って分かった。コイツは誇りを捨ててまで何が何でも仲間のために生きようとしたんだ。赤石を手に入れるために。何千年生きたか知らねえが、コイツはコイツなりに生きたんだぜ。善悪抜きにし

て。コイツの生命にだけは、敬意を払う…！」

「ジョジョ…。」

「仗助…、スージーQさんを…。」

「分かってるって。」

仗助は、スージーQの体をあつという間に治した。

エイジャの赤石…、スーパーエイジャは、すでに出航して見えない郵便船に乗って
いずこかへ送られてしまった。

ナチスドイツ軍人と赤石を守れ!

あの後すぐに、郵便船を追ってヴェネツィアへ。

しかし、調べてもらったが、郵便物は、誰に送ったのか、住所も何も分からないため取り合ってもらえず…。

ジョセフとシーザーが、それどころじゃねえんだ! つと、さつさとエイジャの赤石が入った小包を出さんかいと暴れようとするので、そこにメツシーナが来て、意識を取り戻したスージーQから波紋催眠術で深層の記憶を読み取り、エシデイシに操られたときに書いた小包の宛先が分かったということと伝えに来た。

場所は、スイス。

サンモリッツというところだった。

つまり、残る柱の男達は、スイスに在るといふことになる。

指輪溶解まで、残り6日と迫った今、とにかく時間が無い。

ワムウから指輪の強奪もそうだが、それ以前にスパーエイジャが敵に渡りそうになっっていることが問題だ。

しかも、運悪いことに10分前には、スイス行きの貨物列車が出発していた。

「俺らもついてっていいんすかね？」

「何言ってるんだ？ ワムウもいる可能性もあるんだぜ？ 指輪が溶け出すまで6日しかねえんだ、それにお前の能力は相当使えるしよ。」

「……行くしかないよ。仗助。」

「うん……。」

「さあ、乗って。」

ミナミと仗助は、列車を追うための車に乗せてもらった。

スージーQが見送りに来ていたのだが……。

「おい、スージーQ！ さよならだぜ！ でもいつか、ヴェネツィアに戻ってくるからよ！ もっと綺麗になる化粧を覚えときな。デートの時によ！」

「もう……、大馬鹿野郎！」

そうは言いつつ、とつても嬉しそうなスージーQだった。

そして一行は、出発した。

「……。」

「どうした？ ミナミ？」

「エチケツト袋、忘れた……。」

「おいおいおい！ 車酔いかよ！ だいじょうぶなのかよ、おい！」

「我慢してなさい、ミナミ。スイスまでノンストップで行きますので。」

「はい…。」

「姉ちゃん…、がんば…。」

事態が大変なことになっているので、車酔いで休んでいる暇も無い。ミナミは、ひたすら耐えることにした。

そして、数時間してスイスの国境に着いた。

そこで国境を越えるための手続きをしている貨物列車を見つけれられ、サンモリッツまであと一時間というところで見つけられた幸運が巡ってきた。

「おーい、ミナミ、起きろ。今から列車襲うからよ。」

「ふえ…。」

「物騒つすね…。」

「非常時です。法律など気にしているわけではありません。」

「それに、場合によっちゃ、仗助。お前の出番だ。破壊した列車も直せるだろ？ そうすりゃ証拠も何も残らないぜ。」

「うわあ。」

その時。

車の後ろからパツパーッと車の音が聞こえた。何度も何度も。

あまりにうるさいので、ジョセフが飛び降りて文句を言おうとしたら…。

その車に乗っていたのは、厳つい軍人達だった。

「な…、ナチス！」

「ナチス？ えっ、ナチスって…、あのナチスドイツ？ そっか、この時代ってその時代かあ…。」

ミナミは、自分達が本当に過去の時代にタイムスリップしているのだという実感を改めて感じた。

「フフフフ…、元氣そうじゃあないか。たいした成長ぶりだな、ジョースター！」

「えっ!？」

車の後部に乗っている偉そうな軍人（たぶん上官）が、足を組んだ状態で、意外なことを言った。

「おい！ 俺はナチスなんぞに知り合いはいねーぞ！」

「フフフフ。」

しかし、相手の車は、先へと進んでいく。

すると、メッシーナが、皆に、列車がすでにナチス軍人達に取り囲まれていること

を伝えた。

そして、ナチス軍人が列車の中から、ひとつの小包を見つけ出した。

そこに押された紋章のハンコは……、リサリサの屋敷のものとだった。

そして、車に乗っていたあの上官軍人が車から降り、その小包を破いた。

するとエイジャの赤石が出てきた。

「なぜナチスがエイジャの赤石を！」

「この赤石は、我が軍が研究材料として預からせてもらう。君達は3週間前からすでにヴェネツィアで、我々の監視されていたのだよ。ローマで実験体が全滅してから、ずっとね。波紋修行のことも、エシデイシのことも、そして……、郵便局でのことも……な。」

「あつ！ あの男の人……。どこかで……。」

「そうだ。娘。ヴェネツィアで、昨日のことだ。赤石を盗もうとしたが、ジョジョ、君に捕まって、カラシをかけられたチンピラさ。変装していた私の部下だ。」

「なに、気安く呼んでやがる！ それよか、赤石を……。」

「我々は、この先のロツジにいる。ついて来たまえ。君らに赤石と、カーズ達の話を知りたい。協力し合うのではないか……、まんざら知らぬ仲ではあるまいし、……ジョジョ。」

「だ〜か〜ら！ 気安く呼ぶなつての！」

「うそーん……。なんか、事態がややこしいことに……。」

「リサリサさん……。どうするんです?」

「行くしかないわ……。カーズに赤石が渡るよりはマシ。」

「うわー……。あの歴史に刻まれているナチスに関わるなんて……。」

「すげー体験だぜ……。」

ミナミと仗助は、これからのことに不安で汗をかいた。

「ところで、そののぺったんと潰されたパンみたいな頭の小僧と、同じ顔した娘。未来から来たと情報を得ている。その話も……。」

「あつ。」

「?」

「ああん? 今、てめえ、俺の頭がなんだって?」

「じょー……すけー……!!」

「グゲツ!」

ナチスに今逆らうわけにいかないため、全員で止めた。

「どうしたのだね?」

「いいえ! なんでもないですう! アハハハハ!」

ミナミは、仗助の頭を押さえつけながら、相手の上官軍人に無理矢理な笑顔を送つ

た。

「…よく分からんが。まあいいだろう。」

「…ホツ…。」

「うぐぐぐ…。」

「仗助…、気持ちは分からんでもないが、今は軍国家を丸々相手にしている場合じゃねえんだ!」（※髪型の事情は一応聞いている）

「抑えてくれ!」

「イダイイダイイダイ…、死ぬう…。」

「あら、ごめんなさい。もうだいじょうぶでしよう。」

そしてやっと仗助は解放され体をさすっていた。さすがに波紋使い4人がかりで押さえつけられたら、波紋使いじゃない仗助には辛すぎる。

そして、一行は、この先のロッジへ、ナチス軍人達に連行されるような形で向かうこととなった。

そして、それから五時間後。ロッジの2階にて。

「お前ら、あんまし、未来のこと話してないだろうな？」

「そうは言っても…、私達、国籍は生まれも育ちも日本ですよ？ ジョセフさんの血が半分流れてますけど、それだけだし。世界情勢の歴史の事なんて、教科書で習った程度だし。後の偉人や悪人達がどうなつたかとかなんて…、何も分かりませんよ？」

「そしたら、えらいガツカリされたつすよ。こっちは、知ってる限り事話しただけなのに…。けど、ナチスがもうないってことには、えらい食いつかれましたけど。」

「ひとつ、教えてくれないか？」

メッシーナが言った。

「なんです？」

「…君らの時代には、柱の男達はいないのか？」

「いませんよ。そもそも存在すら知りませんでしたよ。」

「なるほど…。それが、勝利したと捉えるべきか…。それとも逃がして機を待つているのかととるべきか…。」

「あ…。」

そうだ。自分達は今、自分の父親の若い頃の世代へと来ているのだ。

もし、自分達のせいであの柱の男達を逃せば…、未来にいかなる影響を及ぶすか分かったものじゃないのだ。

「そう、堅くならなくていいですよ。」

「でも…。」

リサリサの言葉に、ミナミは不安そうに呟く。

「存在すら知らないということは、波紋の一族の歴史と共に、柱の男達の歴史も終止符を打たれたということでしょう。ミナミ。あなたの波紋の力の弱さがそれを物語っている。」

「そう…捉えて良いんですかね?」

「ええ。ですが、だからこそ、私達はますます負けるわけにはいかなくなりました。未來を知れたということは、決して安心ではないのですから。」

「……ん?」

「仗助、どうした?」

「……なんか、来たかもしれないっす。」

「分かるのか?」

「いえ……、ただ…。」

仗助は言いにくそうにする。

窓から見えるブルー・ブルー・ローズが、ニヨロニヨロとまるで敵が来たと言わんばかりに振られていたからだ。

「ジヨジヨは？」

「あれ？ アイツ…、まさか！」

「マズいつすよ！ 下に行ったんなら…。」

「行くな、仗助！」

「行こう！ 仗助！」

「おう！」

シーザーが止めるより早く、サツサーと、二人は、部屋を出ていった。

「ああ、もう！ 二人とも！ この悪ガキどもめ!! やっぱジヨジヨの血筋だぜ！
まったく！」

シーザーが二人を追いかけて1階へ降りた。

「うっ！」

「こ、これは…。」

「おい、お前らなんで降りてきた!？」

二人がそこで見たのは、カーズにより、バラバラに切断されて死んだナチス軍人達の死体と、機械の体をバラバラに切断され、カーズに掴まれ持たれているナチス軍人、シユトロハイムであった。

柱の男から発せられる、一種異様な空気の緊迫感に、ミナミと仗助は、汗をかいた。「ジョースケ……か。まあ、それは別にいい。」

カーズは、そういうと、シユトロハイムの軍服の胸の中から、エイジャの赤石を取りだした。

「エイジャの赤石……この時を待っていた！ 4……いや、5千年！ ついに目の当たりにする！ 元々、この石は、このカーズが手にすべきモノ！」

それからカーズは、ジョセフを見た。

「ジョジョ……、あとは貴様だあ！」

「ドラララララララ!!」

「ふっ。」

カーズが直前に、跳躍してその攻撃を避けた。だが手にしていたエイジャの赤石のペンダントの鎖部分が接触し、壊れる。

「ワムウの腕を変形させた、その見えぬ攻撃！ 見え見えの攻撃の意思をもつていては、バレバレよ！」

「なんて、やつだ……！」

まさか見えないのにスタンド攻撃を避けるなどとは思わなかった。

「カーズ!!」

シーザーがカーズの存在を見て叫ぶ。

「カーズ……、貴様……、このシユトロロハイムを完全にやつつけたと思うなよ!!」

すると上半身しかない、シユトロロハイムが、片腕で体を支えて持ち上げる。

そして、機械で覆われた右目から、凄まじい紫外線照射装置から発せられる光のレーザーをカーズの顔に向けて放った。

カーズは、咄嗟に両手で防ぐ。

そのあまりの威力に、痛みに、カーズはたまらず身を捻り、エイジャの赤石を雪原に落とした。

しかし、ここ、雪原の坂道。

重力に従い、そして雪の斜面に沿って、軽い宝石は滑っていった。

その先は……、超深い崖。

「ああああああああああ!!」

「しまったー！ー！ー！ー！」

「行け！ ジョジョ！ お前の方が近い！ 走れ!!」

シュトロハイムの叫びに従い、ジョセフが走り出す。

そして、カーズも痛みを堪え、走り出した。

「なんつって。ドラァ!!」

さつきまでエイジャの赤石が崖に向かって落ちていくのを焦っていた仗助とミナミが、ケロッツとして、表情を変え、そして仗助が、床に落ちていたエイジャの赤石のペリダント部分の鎖の欠片を拾い、クレイジー・ダイヤモンドを使った。

しっかりと握り込まれたソレに向かって、さつきまで雪原を滑っていたエイジャの赤石が、逆方向へ、ぶっ飛んでいき、仗助の手に収まった。

「っしやあー！」

「!?!」

「ナーイス！ ベリーナーイスよ、じょうすけー！ー！」

崖から落ちるのも厭わず走っていたカーズは、突然のことについていけず、スピードのまま斜面を滑っていき、ジョセフは、途中で止まって方向転換した。

「まさか、そんな芸当が……！」

「へへーんだ！ 作戦通りだぜ！ 仗助の力を見誤ったな！」

もちろん、ジョセフはこう言っているが、ジョセフもまさかこんなことが出来るとは知らなかった。

「くっ…、おのれええええ!!」

そしてカーズは、必死に滑る斜面に踏みとどまろうとしたが、凍りかけの雪の斜面に屈し、やがて崖から滑り落ちていった。

シーザーとミナミ

「しかし、たまげた！ 実にたまげたぞお！」

「あー、もううるせえな。やっぱ直してやらなきやよかつたんだ。」

「直してやってくれよって、言ったのは、お前だぞ、ジョジョ。」

「あ、そうだったぜ。」

感激してうるさく声を上げるシュトロハイムにうんざりするジョセフに、シーザーがツツコミを入れた。

「まさか、カーズによつてバラバラに切り刻まれた我が精密機器の塊の体を一瞬にして直してしまうとは！ いったいどういう原理だ!？」

「えーと…、触っただけっすけど。」

「でも、弱点はありますよ。」

「ほう？ それは？」

「死んだら……、生き返らせられません。あと、完全に消滅している場合も直せません。」

「……ふむ、なるほど。神の奇跡のごとく万能とはいかんか。我が軍の研究材料になると思つたが、それでもなさそうだな。」

「げー！ 勘弁してくださいっすよ！ 実験体なんてごめんですからね！」

「フハハハハ！ 無駄だ無駄！ その力、我がナチスのために捧げるがいい！」

「関節ひとつ動かせないほど、グシャグシャに変形させますよ！ 脳みそも金属と同化させて、永遠に生きさせますよ！」

「うお…、そのような永遠は、勘弁願う…。だが、そのようなことも出来るのか？」

「……過去に2名ほど、うちの弟は、岩と本と一体化させた経験がございますが？」

「いやん！ なにそれ！ 怖っ！」

ジョセフが裏声で体をくねらせ怯えたようにした。

「だから…、できる限り、うちの弟は怒らさないようにしたほうがいいですよ？ ぶち切れると、元の形に直る保証はどこにもありませんからね。」

「もし、ぶち切れていたら？」

「あなた、とつても芸術的な作品に早変わりでしたでしょうね。もしくは、ただの鉄球か…。残つてる肉体部分も残らず同化させられて。」

「……そうか。」

さすがのナチス軍人であるシュトロハイムも想像して、冷や汗をドツとかいてい

た。

「それはそうと、リサリサさん。」

「なにかしら？」

「保険のため、エイジャの赤石の一部を拝借するってできますか？」

「つまり赤石を砕くと？」

「一部だけです。」

「それは…できないわ。」

「うーん…、装飾部分は結局飾りだから…、今回はなんとか取り返せたけど、装飾部分を外されたら仗助のアレでも無理だから…。」

「なるほど、そういうことなのね。ですが、完全なる形でなければ、エイジャの赤石は、その意味を成しません。光の屈折が少しでも狂えば…、スーパージェンとしてのは発揮できないのです。」

「じゃあ、諦めます。」

ミナミは、自分が出した提案を却下され諦めた。

「ところで、ミナミ…といったな。」

「はい？」

シュトロハイムに話しかけられ、ミナミは、シュトロハイムの方を見た。

「お前にも、この仗助という小僧と同じような力があるのではないのか？」
「っ……。」

「その反応！ やはりか、双子だとは聞いたが、同じ腹の中で育っただけに同じ力が宿つていても何ら不思議ではない！ さあ、教える！ お前の力はなんだ!?!」

「そ、れは……。」

「おい、シユトロハイムのおっさん。聞かれたく無いことは聞くなつて親に教わらなかつたかよ?」

怯えるミナミにジヨセフが庇うように腕を伸ばして間に入った。

「ジヨジョー！ もし、この娘の力が、柱の男どもにとつて脅威となる力ならば、情報は共有すべきだとは思わんか！ 柱の男達にエイジャの赤石を渡さぬためにもな。」

「だから……。」

「私の力は……、この世でもっとも不平等な力……。」

「ミナミ。」

「私の力は……、生命から寿命を奪い取る力です。」

「それだけか?」

「……。」

「姉ちゃん、無理すんな！ 喋りたくないなら喋らなくていいんだぜ!」

「…ハッ！ ご、ごめ…。」

「顔色が悪いな。 仗助、先にホテルで休ませろ。」

「待て、まだ話は…。」

「俺達は確かに、今、あんた達ナチスと協力体制にあるが…、今にも倒れそうな女の子に無理矢理尋問するようなことはさせねえぜ。」

シーザーが庇っている内に、仗助がミナミに肩を貸して、その場から逃げた。

シウトロハイム率いるナチス軍がとつてくれたホテルの一室で、ミナミは、ベッドの上で枕を抱えていた。

近くのテーブルには、ルームサービスの食事がほとんど残されていた。

仗助は、今いない。

すると、コンコンと扉が叩かれた。

「入るぞ。」

シーザーだった。

ミナミは、シーザーの方を見ず、背中を向けていた。

シーザーは、食べ残された食事を見て、ため息を吐いた。

「食える内に食つとけ。いつ奴らが襲つてきても対応できるよう、体力が必要だからな。」

「……食欲無くって。」

「なあ、ミナミ。すねてるのか？」

「違います。」

「すぐ否定するってことは、機嫌が悪いって証拠だぞ？」

「もうー！」

「おつ、やつとこつち向いたな。」

起き上がったミナミに、シーザーは、クスツと笑い、椅子に座った。

「……あの機械野郎じゃねえが、教えてくれないか？ お前の力のこと。」

「つ……。」

「アイツには言わない。もちろん、ジヨジヨにも、先生にもだ。約束する。」

「！」

「無理に吐き出したくなくっても、吐き出せた方が楽になるって事もあると思つてな。」

ましてや秘密にしていることだと余計に。余計なことだったか？」

「……………本当に？」

「ん？」

「本当に…言わない？」

「もちろんだ。神に誓っている。」

「……………じゃあ、教えます。私の能力は、さつきも言いましたが、生命から寿命を奪うこと。だけど、その命を、他人に与えることもできます。つまり、生と死を自由にする力……………。限られた、あらかじめ決められた寿命の長さを変えてしまうんです。」

「それで、さつき『この世でもっとも不平等な力』って言ったのか。」

「はい……………もし、この世の命の総量が決まっているのなら……………、それを奪って、勝手にするって……………、良いことだと、思います？」

「……………思わんな。」

「あと……………」

「まだあるのか？」

「……………これだけは、これだけは、私が一番嫌いなことなんですけど……………」

「なんだ？ 言ってみろ。」

「……………1回だけ……………、どんな死因も無かったことにできるんです。」

「死因を…無かったことに？」

「つまり、1回だけなら…、無傷で生き返ることができるんです。例え、重傷を負って死んでも、病気で死んでも、毒とか薬で死んでも。」

「…もう1回死んだら？」

「完全に死にます。」

「……そいつは、知られるわけにはいかねえな。」

ナチスは、自分達の支配が長く続くことを目的に不老不死を狙っている。

もし、死を無かったことにできるなんて力を知られば、バラバラにされたシユトロハイムを直した仗助以上に狙われることになるだろう。

1回だけと制限はあるものの、調べられ、その力の根底を暴かれて、量産なりして運用できれば自由に命を操れる術が手に入るだろう。

「嫌う理由は、1回しか使えないからか？」

「それもありませんけど…、もしその1回で生き返った場合…、あらかじめ入れられた寿命分しか残りません。」

「つまり？」

「例えば、1年分だけなら…、1回死んだ後、1年しか生きられません。新たに寿命をあげないとどうやっても死にます。」

「それを解消するためには、他人の命を奪うしか無いってことか。」

「だから……、嫌いなんです。誰かを救うためには、誰かを犠牲にしないと成り立たない、こんな力！ 欲しくなかった！」

ミナミが頭を抱えて叫ぶと同時に、部屋の天井や床、壁からブルー・ブルー・ローズの鮮血色の根っこが出現した。

「こ、これは!?!」

「あつ……、逃げてシーザーさん！」

「これがお前の力か、ミナミ！」

「私、この力を制御できないんです！ 肥やしにされる前に……、あつ。」

すると、フツと何事も無くブルー・ブルー・ローズは消えた。

「消えた……。消したのか？」

「いいえ……。いつも勝手に出て勝手に消えるから……。」

「どうも……、ミナミの感情とかに反応しているくさいな。あの時も、カーズ達を追い詰めてたな。カーズ達は、ミナミの力がやばいって感じてたのかもな。」

「でも数千年単位で生きてる相手が……、1、2年ちよいの寿命の変動を気にするとは思えないんですけど。」

「もしかしたら、ミナミの知らない部分があるんじゃないのか？ 隠された力の特性

とか。」

「私の…知らない…。」

「嫌っているからこそ、盲目になって、見えてない部分があるかも知らないだろう？」

「それは…そうかも…。」

「制御できれば…、カーズ達には脅しぐらいにはなつたと思うが…贅沢は言えないか。」

「……私の力について、知っている範囲ですが、以上です。聞いてくれて…、ありがとうございます。」

「礼には及ばないさ。話を聞いただけで、なにもできなくてすまない。」

「……本当に…ありがとうございます。」

ミナミは、頭を下げ、それから微笑んだ。

「あつ、やつと笑つたな。」

「へ？」

「やつぱレディには、笑顔が一番だ。ミナミ、君が力に悩まず、いつかずつと笑顔でいられることを祈るぜ。」

するとシーザーが立ち上がり、ミナミの額にキスを落とした。

「わっ！ シーザーさん！」

「幸運のおまじないさ。」

「もう！」

「ハハハハ。」

シーザーは、プリプリ怒るミナミの視線を受けながら、笑いながら部屋を出ていった。

その後、扉の隙間に挟まっていた、青いバラの花が落ち、シーザーの頭部に落ちて、光となって消えた。

誇り高き意志に添えられし青いバラ

エシデイシが、エイジャの赤石を送ろうとした住所。

そこは、閉鎖されたホテルだった。

周囲は、景色も素晴らしく、他にもホテルなどの宿泊施設や観光施設があるような場所だ。

しかし、こんな素晴らしい観光地の中に……、柱の男達と呼ばれる怪物達が潜んでいるのだ。

シウトロハイムの方は、別件で今いない。（隊を率いるほど地位もあるので色々大変らしい）

今、ミナミと仗助は、ジョセフ達と共に近くの観光ホテルの屋上から、その寂れた閉鎖されたホテルを双眼鏡で見ていた。

仗助は、思わず自分の心臓の上を手で掴んだ。

指輪が溶解するまで、あと5日。

すでに1週間も無いのだ。

迫り来る、タイムスリップに、自然と緊張感と恐怖が押し寄せてくる。

敵の潜伏先が分かった以上、このまま黙って待っているわけにはいかない。

なので、シーザーは、太陽が高いうちに攻め入ることを提案した。メツシーナも同意していた。

だが…ジョセフは、反対した。

太陽が逆に照っている時間帯だからこそ危険だと。カーズ達は、数千年をそうやって過ごしてきた生き物だから外からの敵に備えないわけがないと。

「私もジョセフさんに賛成です。」

「俺もつす。」

「おい！ お前らそろいもそろって…！」

「敵の牙城に入るってことは…、虫がクモの巣に入ることと同じぐらい危険だと思っ
てます！ 攻撃は最大の防御だなんて言葉もありますけど、それは、逆に言えば、自分
がそれ以上の攻撃力で潰される可能性もあるって事ですから！」

「仮にですよ？ もし相手がこちらが来ることを知っているなら、余計にヤバいっす
よ。いくら波紋使いの達人でも、あの大きな建物ごと爆破されたりとかされたら、どう
なります？」

「むっ…。だが、しかし…、相手はカーズのみ。だからこそ、今が好機なのだ。」

「カーズ達は、おそらくそのような手は使いません。彼らは、つい最近まで2千年もの間、眠っていたのですから。」

「……それに、さつきから……。」

「さつきから？」

イクナ

「……こういう時って、勝ち目の無いほどの敵がいるって時なんです。」

「今……なんか、聞こえましたか？」

「ええ……。ミナミ、今のは？」

「……私の……、もうひとり……なんていうか……別人格的な？　こういう時に警告してくるんですよ。」

「姉ちゃんの、コレ……、外した試しがないんですよね。」

「だが……それでも！」

シーザーは、それでも食い下がる。

「……死……ヌゾ……？」

「ミナミ？」

「あつ……。すみません、今は……。……イ、クナ……。オマエは……。負ケル……。」
「なっ!?!」

「い、今のは、姉ちゃんの言葉じゃないっす! ブルー・ブルー・ローズが……。姉ちゃんの守護霊的なモノが口を借りて喋っただけっす!」

「俺が……。負けるだど?」

シーザーは、ワナワナと震えた。

シーザーとて、ジョセフと共に、柱の男達に勝つために修行してきたのだ。それを全否定されるような言葉に、怒りに震えていた。

「撤回しろ! 今の言葉を!」

「わっ!」

「おい、シーザー! さっきのはミナミの言葉じゃねえんだぜ! ミナミに掴みかか
るな!」

「ぐ、くく……。」

ジョセフに背後から羽交い締めになされてミナミから引き離され、シーザーは、悔し
さに歯を食いしばる。

「おい、ブルー・ブルー・ローズっていったな!」

「えっ? あ、はい。」

「てめえの言葉、今すぐ撤回しろ！ 俺は、俺は…、石仮面のために死んでいった爺さんの因縁に決着を付けるために…、今日の日のために死に物狂いで血反吐を吐くほどの努力をしてきたんだ！ それを全否定しやがって、ぶっ殺すぞ！」

「う…。」

するとミナミの目から光が消え、気味の悪い闇のような暗さを孕んだ。

そして、その口から漏れる言葉は…。

「オマエは…、死ヌ…。ワムウ…殺サレ、ル。」

「ワムウ!? ってことは、あそこにいるのは、カーズじゃなくて、ワムウなのか、ブルー・ブルー・ローズ!?」

「てめええええ!!」

「馬鹿野郎！ 口を借りてるだけで、ソイツはミナミだ！ ミナミを殺す気か!」

「落ち着きなさい、シーザー!」

リサリサが、パンツ!とシーザーの頬を叩いた。

「仇を目前にして、焦るアナタの気持ちは分かっています！ ですが、敵を間違えてはなりません！ その激情をミナミに向けるのはお門違いです!」

「…:…:けれど、俺は負けるわけにはいかない！ 例え、守護霊だのなんだのの予言だろうとな!」

「イクナ。」

「いいや、お前の言葉なんぞに惑わされるか!」

「シーザー!」

「てめえもだジョジョ! 怖じ気づきやがって! 相手がワムウなら、余計に攻め込まないといけねえだろうが! お前の未来の息子にはもう時間がねえんだぞ!」

「っ!!」

「分かったなら、俺に触るな、このスカタン!」

ジョセフを振り払い、シーザーは、ペランダから飛び降りた。

「待て、シーザー!!」

「ど、どうするんっすか!?! あのままじゃ、シーザーさんが!」

「メツシーナ! シーザーがホテルに入ろうとしたら止めなさい!」

「はい!」

「……あれ、シーザーさん……は?」

「姉ちゃん……、マズいことになっちゃった……」

「……シーザーさんが……」

するとミナミは、ポロポロと涙を零した。

「どうした、姉ちゃん!?!」

「…シーザーさんが…、ボロ雑巾のようになって、死んじゃう…。」

「ブルー・ブルー・ローズか!? ブルー・ブルー・ブルー・ローズの予言なのか、姉ちゃんハツキリして!」

「たぶん…そうだと思う…。っていうか…、もう行っちゃってるんだよね?」

「………て、手遅れ?」

「………こういう時ってさ…、外したこと…ないんだもん…。」

「まだそうなると決まったわけじゃねえだろ!? 俺も加勢してくるぜ!」

「なりません、ジョジョ!」

「なんでだよ!」

「我々がすべきこと! それは、第一にエイジヤの赤石を守ることなのです! いかなる犠牲を出そうとも守り通さなければなりません!」

「く、ぐ…、くそー! あんたやっぱ鬼だ、悪魔だ! あんたの愛弟子が死にに行こうってつてのに! 死が確定されかけてなのに、見捨てるつてのか!」

「……。」

「リサリサさん…。」

「タバコ…逆です…。」

「!」

ジョセフはミナミと仗助の言葉で、リサリサの動揺にやつと気づいた。

「……ですが、シーザーが何もせず死ぬとは限りません。ジョジョ、エシデイシを打ち倒したあなたと同様に、シーザーもまた、柱の男と同等に戦えるほどの力を身につけているのですから！ ですが、…ワムウは、必ず来るでしょう！ 仗助、アナタを殺すために！」

「ハッ！」

そうだった。仗助は、あの時ワムウの腕を変形させたのだ。その恨みを晴らすため、ワムウは、仗助に死の結婚指輪を埋め込んだのだ。

絶対に逃がさない。そして、必ず自らの手で殺すという意味を込めて。

まさか…、だからブルー・ブルー・ローズは、予言したのだろうか？

シーザーを殺してから、必ずワムウがこちらに来ることを見越して！

「……けどよお…。例え、未来が分かったとしても変えてやるのが、予言なんじゃねえのか？」

「ジョセフさん…。」

「逆に捉えるんだ！ シーザーを死なさないための警告だつてな！ 行こうぜ！ ミナミ、仗助！ ブルー・ブルー・ローズとかいう守護霊をあつと驚かせてやればいい！」

「……………ジョジョ。」

リサリサは、ジョセフの言葉に、火を付けかけていたタバコを捨てた。

「行きましょう。」

「えらい、心変わりだな、先生。」

「私とて人間です。気も変わる時もあります。」

「…へへへ。」

素直じゃないなと、ジョセフは笑う。

だが…、間もなく、あの寂れたホテルの一部が倒壊したことで、その考えは変わる
ことになる。

駆けつけた一行が見たのは……、崩壊したホテルの一部と…。

鮮血のシャボン玉がひとつ…だった。

「シー…ザー…さん…。」

ミナミは、泣き崩れた。

「うう…、この血のシャボン玉は…、ああ！」

ジョセフがその血のシャボン玉に触れると、凄まじい波紋が手に響き渡り、彼に知らしめる。

それがシーザーの波紋を応用したシャボン玉の技であることを。

シャボン玉が割れ、その中から、シーザーがいつも身につけていたバンドナのヒモと、ワムウが口に付けていたはずの解毒薬が入ったピアスだった。

「うそだ…、シーザー…嘘だつて言えよ！ 俺のこと、スカタンつて言えよ！ なあ！！」

ジョセフは、周りを見回し叫ぶ。だが空しくその声が響き渡るだけで、答える相手はいない。

「ウソ……つすよね……」

「仗助…、アレ……」

仗助とミナミが指差す先には、大きな瓦礫の下から流れ出る大量の血……。

それは、どンドン流れ出てくる。

つまり。

「シーザー…？ そこに…いるのか…、このデカイ岩の下なのか!?!」

「おおお……、シーザー……」

リサリサがついに気丈な感情を決壊させ、泣き崩れた。
「シーーーーーザーーーーーー!!」

「ーーーーーつるせえ!!」

「どわあああ!?!」

次の瞬間、大岩（瓦礫？）が跳ね飛ばされた。

「うるせえんだよ、このスカタンが！ いちいち叫ばなくても……、つて……。」

そこには、無傷のシーザーがいた。

流れ出ていた血も消えていた。

「先生……、泣いて……るんですか?」

「シー……ザー……、あなた……。」

「ちよ、ちよいまち……!! 何が何だか!? えつ、待つて! おい!」

何が起こったのか分からず、涙も引つ込んだジョセフは、大パニック。

そして、ミナミと仗助は……。

「あ……。ウソ……。」

「姉ちゃん……、これって……。」

「……あ……ああ……うそだ……。そんなことつて……。」

「……ハッ！ ……み、ミナミ……、俺は……、まさか……？」

自分が今ここに居る理由に、思い当たったシーザーが、ミナミを見た。

シーザーの視線を受け、ミナミは、フウツ……と倒れた。それを慌てて仗助が支えた。

「どういうこと？」

リサリサが聞く。

「………姉ちゃんの……力です。」

「ミナミが？」

パニックが治まったジヨセフも聞いた。

「………1回だけ………、どんな死因も……無かったことにできる、力……。けど……、もし青いバラの花が1本しか入ってなかったら、1年しか生きられなくなる、力……！」

「そういえば……確かに……、青いバラの花が散る光景が脳に残っている感じがする……。それか？」

「シーザーさん、どつかで青いバラの花を拾ったか、気がつかずに体に入ったかしたんじゃないっすか？」

「拾った覚えはない……。たぶん、後者だな……。なんてこった……。」

「つてことは、残り寿命……、1年足らずかも……しれないっすよ。」

「……補給しない限りは、そうなるか。」

「知ってるんすか？」

「……本人から……聞いた。」

「姉ちゃんか……？」

「聞き出したのは俺だ。その方が気休めになると思ったんだが……。」

シーザーは、痛ましげに、表情を無にしてホロホロと泣いているミナミの様子を見た。

「俺自身が……ミナミの心を抉ちまうことになるなんて……。」

シーザーは、その悔しさに涙を零した。

シーザー・A・ツェペリ。

享年、20になる予定が……、ブルー・ブルー・ローズのもたらした奇跡により残り1年の寿命を得る。

ハッター

死者の蘇生。

それは、誰もが夢見たであろう、願い。

その力を操ることできる、ブルー・ブルー・ブルー・ローズが作り出す、青いバラの花。

その正体は、生命から奪い取った命…、寿命の塊であり、取り込めばたった1回だけあらゆる死因を無かったことにできる、奇跡の力。

青いバラの花言葉。

『夢叶う』

『不可能』

『奇跡』

『神の祝福』

決して自然界に存在しない、その花は、人間の叡智によって生み出された、あり得

なかった花。

それゆえに、決して叶うことのなかった夢そのものの実現であり、神の奇跡として祝福を受けた。

その花に込められた人間達の知恵と探究心と、奇跡を実現しようとした意志が……、正しいのかどうかは、真なる神の知るところであろうか？

ジョセフ達は、シーザーによって血を流したワムウの血を追っていた。

「けどよお…、本当に行く気か？ ミナミ。お前だけ引き返していいんだぜ？」

「いいんです…。私が行くことに意味があるんだと思ってますから。」

「…ぶつ倒れても助けねえぞ？」

「だいじょうぶです。もう…倒れませんから。」

「姉ちゃんの守護霊（スタンド）の射程範囲は、町一つぶんの広範囲なんです。けど、近ければ近いほどパワーは強くなるから…。」

「まさか、奴らから、寿命を奪う気か？」

「…それがもつとも効率的だと思っただけです。」

「でもよお、それを制御できりゃいいが、できないんだろ？」

あれからミナミの能力の詳細を聞いたジヨセフが言う。

「ブルー・ブルー・ローズは、姉ちゃんの心に従って動くこともあるんつすよ。…ここまで来たら、ブルー・ブルー・ローズに任せるしかないつす。」

「従って動くこともある…、不安だぜ。」

「ジヨジョ、シーザー、ミナミ、仗助。ここはもう敵の虎穴です。気を抜かないように。」

シーザーを失ったと思ったシヨックからすっかり立ち直ったりサリサが言う。

シーザーは、ずっと黙っていた。

「……シーザー？ おい？」

「…すまない。あれだけ息巻いという、仕留めきれなかった。」

「仕方ねえよ。見ろよ、この血の跡、これだけワムウを痛めつけたんだからお前の頑張りは相当だったって分かるぜ？」

「ワムウ…、奴の流法（モード）は、風だ…！ あの時、俺達を殺しかけたあの技もそれになんだものだ。」

「腕は…直つてたのか？」

「ああ。だから、完全な状態の神砂嵐を喰らっちゃった…。」

「つてことは、間違いなく、仗助を指名するだろうね。」

「俺のこと、殺すつて宣言してたしよお…。」

すでに指輪は解毒薬で無くなっているが、ワムウ自体はまだ生きている。

「次の戦い、俺も参加させてくださいっす。」

「おいおい、お前、身体は並程度なんだから引つ込んでな。」

「その並程度の奴の力で何回助けたと思ってるんすか？」

「あく、そうね。半端じゃないよな、その直す力。じゃあ、頼りにするぜ。」

つというわけで、仗助の戦いへの参加決定。

やがて、ある扉の向こうに血が続いていた。

「この先だな。ん!？」

「どうした!？」

「うえ…、なんだよこのドアノブ…、ごっついおっさんの手を握ったような気色の悪い
感触だぜ。」

「それ…、本物。」

「はっ? ハッ!」

見れば、ドアノブを手の部分とし、ちょうど人型にブルー・ブルー・ローズの根っこがくつきりと扉を象っていた。

「ちい！ バレたズラ！」

すると、扉が変形し、ひとりの男が現れた。

「WRRRRRRRYYYYY!!」

「吸血鬼か！」

「吸血鬼なんぞに構ってる暇はない！」

シーザーが波紋のシャボン玉を放ち、吸血鬼に当てようとしたが、それは、吸血鬼の身体に発生した凄まじい数の棘によって防がれた…。ように見せかけて波紋のシャボン玉に込められた波紋が棘に流れて、吸血鬼は、絶叫を上げながら溶けた。

「馬鹿なズラああああ!!? シャボン玉は当たらないように割ったのにいいいい!!」

「馬鹿か、波紋伝導率100パーセントの特製のシャボン玉液だぜ? 割ったがぐらいで防げるか。」

「名乗ってないのに、もう終わり? そんなズラああああ!!」

そうして、吸血鬼・ベックは、名乗る暇も無く完全に溶けてしまった。

「チツ! 気色の悪い語尾付けやがって。」

「ワーオ、怖いね、シーザーちゃん。」

「とつとと、行くぞ。」

「あつ、待つてくれよ。」

先へと進むシーザーを、にやついたジョセフが追いかけた。

ワムウの血の跡の間隔は、進んでいくごとに間が開いていた。

それは、すなわち、傷が塞がり始めていること。

ワムウは、移動しながら回復していったということだ。

シーザーは、それを見て険しい顔をする。

「シーザー……、自分のやったことが無意味だったなんて、思うなよ？」

「つるせえ……、黙つてろ。」

「シーザー。あなたの残る余命を、無駄にする気なのですか？」

「ハッ！」

リサリサの言葉にシーザーは、我に返った。

ワムウを仕留めることもできず、ミナミの力で蘇った自分は、ついまたも激情に任せて死に急ごうとしていたことに気づいたので。

「すみません。先生。……ミナミも、ごめん。」

「いいんです。」

ミナミは、そう返事をした。

返事こそしつかりしているように聞こえるが…。

「ミナミ…、顔色が最悪だぜ？」

「だいじょうぶです。」

「いや、だいじょうぶじゃないだろ？」

「だいじょうぶです！」

「気にしている時間はありません。行きましょう。ジヨジヨ、シーザー、仗助、ミナミ。」

リサリサの言葉により、一同は、血が続いている扉の先へ向かった。

「……来たか。…むっ？」

薄暗い、遺跡のような壊れた柱が並ぶ場所の中央にあぐらをかいて座り込んでいるワムウが、シーザーの姿を見て、ピクリツと眉を動かした。

「貴様…、なぜ生きている？」

「…追い出されたんだ。あの世から。お前とカースを必ず仕留めろってな。」

「突っ走るなよ、シーザーちゃん。」

「お前こそ、油断するなよ？ ジヨジヨ。」

「……………なんか、変じゃないっすか?」

「なにがだ?」

「なんで、アイツだけひとりでいるんすか? もうひとりいるはずっすよね…。だって足跡…。」

「それに…、息が…聞こえるよ。」

仗助とミナミがこの場所の異様さに気づいた。

「ほう…。気づいているのか、娘。耳が良いのか?」

するとワムウが指を動かし、暖炉の炎を強めた。

部屋が明るくなり、天井が見えた。

そこには、とんでもない数の人間(?)達が天井に立った状態で張り付いていた。

そして、その部屋の奥の方で、炎とは違う輝きが起こり、吸血鬼達が道を開けるように天井で整列した。

「カーズ!」

「すでに我々は、カーズ様に、永遠の命を授かった選ばれし者…、そう…、100対5よ! 号令と同時に俺達が貴様らを細切れに引き裂いてやるぜ!!」

天井にいる吸血鬼のひとりがそう言った。

そして、椅子に座っているカーズが号令として、指を鳴らそうとした。

「お待ちを、カーズ様!! 私は、ローマにて、ジョースケを殺すと宣言しました。エシ
デシ様が倒された遺恨もあります。ぜひ、戦いの許可を…。」

「ならぬ。我々の目的は、あくまでエイジャの赤石を手に入れること。それを忘れる
なワムウ!」

「…は……。」

ワムウは、渋々下がる。

「では、殺…。」

「それはどうかなく?」

「?」

「これ、見て。」

「むっ! それは…、エイジャの欠片か。それがどうした?」

ミナミがポケットから出した、エイジャの宝石の欠片を見せた。

「これを…。」

「おう。」

それを仗助に渡すミナミ。受け取る仗助。

「ねえ、教えて。アナタが求めているエイジャの赤石って……、もしどこかが狂ったら
…、それって使い物になる?」

「!?」

「覚えてる? ロツジでのこと。仗助の力を見たでしょう? アナタは、たぶん、頭良
いからだいたいのは把握しているはず。なにせ、そっちのワムウの腕を治すのに四
苦八苦しただろうし。分析するのも大変だったでしょ? なにせ見えないんだから。」

「……。」

カーズは、黙っていた。事実だからだ。

「もし…、私達を殺そうだなんて、してみて? あなた達が動くより早く、仗助が不純
物を適当に混ぜたエイジャの赤石の欠片を、スーパーエイジャに戻す。純度が高くて、
大きなエイジャの赤石がいるんでしょう? もし不純物がちよつとでも混ざっちゃつ
たら……、それでもOK?」

「……小娘が……。このカーズを脅すか!」

「やっぱり、ダメなんだね。分かりやす。」

「ぐっ……!」

カーズの悔しそうな声と顔に、天井にいる吸血鬼達が、ミナミを睨む。

これは、事前に打ち合わせしていた作戦だった。

エイジャの欠片は、偶然サンモリツツの土産屋で価値が分かっている店主によつ

て売られていたのを見つけたものだ。スーパーエイジャのものでは無い。

しかし、カーズは、エイジャの赤石の装飾部分を使って手元に戻すのを見ていないし把握していないだろうと踏んでの脅しだった。

それに気づいたとしても、エイジャを削ってしまったとしても直すことは仗助に可能だということは理解するだろう。

なぜこんな回りくどいことをするのか……、それは…。

「何を…我々に要求するつもりだ？」

「ワムウと戦わせて。」

「なに？」

思わぬ要求に、カーズは、顔をしかめ、それを聞いたワムウ自身も驚いた。

「それは、つまりそのなぜか生きている波紋使いに深手を負わされたワムウにトドメを刺す…ということか？」

「あなた達は、自分が優位に立っていると思う？ それとも私達が、生き残るために、あなた達を倒すためなら何もしないと考えている？ それとも…、対等に戦えると思ってる？」

「グヌ〜…！」

「あなた達は、数千年物間、卑怯な手で倒されかけたこともあったんじゃない？ 不利な状況も合ったはずだよ？ それとも、この不利な状況を打破できるって自信も無い？」

「……。」

「いかなる戦いを望むのだ？」

「ワムウ！」

「カーズ様。あの波紋使いの青年にやられた傷は、すでにほぼ癒えております。それに、例えば1対5となろうとも、このワムウが勝ってみせましょう。」

「若干の不正解。ワムウ、あなたと、ジョセフさん、シーザーさん…、そして、仗助が戦ってもらいます。」

「！」

「あなたは、仗助を殺したい。それは、カーズ、あなたも理解しているはず。すでに毒の指輪はないけれど…、腕を変形させられた恨みはあるでしょう？」

「自ら殺されに来るといふことか？」

「そうとられても仕方ないけど、一網打尽にするチャンスじゃない？ あなたを殺す寸前に追い詰めた波紋の戦士、そして…、その前にあなたの大切な腕を変形させた仗助を殺せる…ね。」

「貴様……」

「それに、周りを……見て。」

「！」

言われて彼らは気がつく。

部屋の中にいつの間にか、ブルー・ブルー・ローズの鮮血色の植物の根つこが出現していたことに。

「吸血鬼といえど、寿命を奪いつくされたら、どうなる？　不老不死とは言え、血も必要なあなた達も肥やしになっちゃったら……動けるかな？」

「ぬうう……！」

カーズは、ブルー・ブルー・ローズの存在にドツと汗をかく。

「……カーズ様、どうか、許可を。」

「ワムウ、ならぬぞ！」

「失礼を承知の上で申し上げます……。この状況は、我々にとって不利です。あの娘に従うしかないでしょう。」

「ワムウ！」

「この誓いを立たせます。必ずや、エイジャの赤石をカーズ様の手に！　我が勝利をもつて！」

「……！」

「どうするの？ カーズ。」

「……ぐ、く……、いいだろう。貴様らの要求に従ってやろうではないか。」

「カーズ様！」

「だが、戦いの方法は、こちらで指定させてもらう！ それに異論は無いな！」

「ワムウと戦えるなら、それでいい。」

「よし、ならば、今夜の満月！ 場所は……、ここから、南東15キロメートルのビッツベルリナ山山ろく、『骸骨の踵意石』と呼ばれる古代環状列石（サークルストーン）の場！ 古代の人間共が天体の観測のため作った巨石建造だが、のちに決闘者として多くの戦士達が栄光と死を分け合った所だ！」

「今夜の満月ってことは……、時間にして深夜の12時ってところか。みんな、異論はない？」

「おう。」

「必ず勝つぜ。」

「決闘場か……、すげー戦いになりそうだな。」

「ミナミが話を振ると、ワムウと戦う予定の三名（仗助、ジョセフ、シーザー）が返事をした。」

「そして、決闘の勝敗の品である、赤石を出せ！　それが最低の条件だ！」

「ここには、ありません。」

リサリサが答えた。

「なに？」

「敵の牙城にオメオメと持つてくるほど、馬鹿だと思つて？」

「ならば…、ジョジョ、シーザー、お前達が赤石を持つてこい。」

「私も行く。」

「小娘…お前は…。」

「じゃないと、その鮮血色の根っこがあなた達を襲うよ？」

ミナミが指差すと、チョンチョンと、カーズの腕に、ブルー・ブルー・ローズの鮮血色の根っこがつついた。

「…いいだろう。だが、時間通り戻つてこなければ…。この戦いの話はすべて無かつたことになる。」

「分かつてます。」

ミナミは、ニッコリと笑つた。

カーズは、その笑顔に、グツと悔しげに拳を握りしめた。

「じゃ、行つてきまーす。」

「首を洗って待つてろよ？」

「ワムウの次は、貴様だからな、カース。それを忘れるな。」

それぞれがそう言い、ミナミ、ジョセフ、シーザーは、部屋から出て行つた。

しばらく歩き、ホテルを出たところで。

ミナミは、ガクンツと倒れそうになつた。

「馬鹿！　ほんと馬鹿だぜ、お前はよう！」

ジョセフがミナミを支えた。

ジョセフは、ドツと汗をかいていた。シーザーもだ。

「あんな方法でこつちが有利になる戦いを申し込むなんて作戦だなんて…、お前のブル・ブルー・ローズが言うこと聞かなかつたらどうしてんだ!？」

「…でも…確信はあつた。今なら…やれるつて。この戦い…、これだけハツタリをかけたんだから、必ず勝つてください…。そうしないと、目も当てられないから…。」

「分かつてるつーの！」

「馬鹿だ…。お前は、本当に馬鹿だ。ミナミ。こんな馬鹿な女初めて見たぜ。」

「フフフ…。私だつて…、力になりたかつただけだから。」

顔色がびつくりするほど悪いミナミが無理矢理に笑う。

「けど…、よく頑張つたな。」

「…………えへ……」

ジョセフの腕の中にいるミナミの頭を、シーザーが撫でた。

汗でびっしょりと濡れてしまったブルネットの髪の毛に、チラホラと白髪見えた。

「…ミナミ？ おまえ…。」

「お願いします…。私も、この戦いを最後まで見届けたいから。」

「本当に…、馬鹿だな。」

シーザーは、ギユツとミナミを抱きしめた。

「あー！ シーザー！ てめえ、未来のとはいえ、俺の娘に気でもあるのかあ!？」

「馬鹿！ 何言ってるやがる！ ハグぐらい許せ！」

「赤面してんじやねーよ！ ダメだ、ダメダメダメ！」

「…………フフフ。」

ギヤイギヤイ喧嘩を始めつつ、ホテルに戻る二人の様子を見ながら、ジョセフの背
中の上で、ミナミは、笑った。

そして、ミナミ達はホテルのリサリサの部屋にあるトランクを開いた。

「あつたな。」

シーザーがエイジャの赤石を取り出す。

「ニヤヒヒヒ…、ついでにパンティーでも。」

「こら、ジョジョ！ てめえ！」

「いいじゃねえかよ、減るもんじゃ…、あれ？」

冗談こいてトランクの中を物色しようとしたジョセフに怒るシーザー。

するとジョセフが、荷物の中に妙なモノを見つけた。

「おおよそ、この状況に似つかわしくないモノ。」

それは、写真アルバムだった。

「写真？ リサリサさん、写真を持ち歩いてたんだ。」

「お、おい！ これ、エリナお婆ちゃんだ！」

「ああ、ジョジョの爺さんの奥さんか？」

「あと、後半は…、こいつは…。」

1885年。

それは、今から50年前の写真の日付だった。

「この顔の傷は、たぶんスピードワゴン爺さん！　そしてこっちの女性は、エリナ婆ちゃんの若い頃かあ!？」

「わー、メツチャ美人。」

ジョセフの横からミナミが写真を見て言った。

「それに、こっちは、ストレイツオじゃねえか！　狂気に走って、石仮面を身につけて俺と戦った！　そいつがなんで、赤ん坊を抱いているんだ？　そーいや…、今更だけだよお、シーザー、お前、リサリサのことどんだけ知ってるんだ？」

「さあな…、俺は先生を尊敬しているだけだ。母親のように慕っているだけだ。その過去を詮索する気はないぜ。」

「かー！　使えねえな！　よくよく考えてみろって！　なんであの女が、こんな写真を持つてるかってなああ！」

「……この赤ちゃん…、もしかして、リサリサさんだったりして？」

ミナミの言葉に、場がシーンとなった。

「待て待て、ミナミい？　そいつはどんな冗談だ？　だとしたら、あの女…リサリサはよお…、50歳ってことになるぜ？」

「でも、赤ちゃんって、生まれた時からある程度は面影はあると思うけど…。ちよつと目元ととか、鼻筋がリサリサさんっぽくない？　あ、そういえば、修行中の時に聞いた

けど、波紋つて年を取るスピードも遅くするんじゃないかなかったでしたっけ？」

「……確かに、あり得るか……。おい？ シーザー？ どうした？」

「あ…、いや、なんでもねえよ。」

「お前…、ガラにも無く動揺してないか？ リサリサ先生が50歳つて可能性に
よお。」

「るせー！ー！ 俺は別に先生がいくつだろうとなあ！ 尊敬する気持ちも何も変わ
りやしないぜー！」

「まあ、どう見ても20代後半にしか見えない人の、実年齢がその2倍ぐらいだつて
知ったら誰でもビックリすると思いますよ？」

「ミナミー！ー！」

「まあ、それはそうと、時間ないから、急ぎません？ ここから15キロですよね？」

「お、そうだった！ 行こうぜ！」

三人は、エイジャの赤石を手に入れ、決闘の場として指定された場所へ急いだ。

戦車戦

ミナミ、ジョセフ、シーザーは、15キロ先にあるサークルストーンの遺跡についてた。

ジョセフがカーズ達に見せつけるように、エイジャの赤石を掲げ、そこにマッチの火を浴びせる。するとその光を吸収・増幅したエイジャの赤石からレーザーのような強力な光が出た。

カーズは、それを見て笑う。本物だと確信したのだ。

そして、リサリサと仗助が来て、ジョセフは、リサリサにエイジャの赤石を渡すと同時に、写真アルバムを見せた。

「……見たのですね。」

「ああ。」

「この写真を見たということは、話さなければならぬようですね。いや…、戦いの前に話そうと思っていたわ。」

「リサリサ先生…あんな…」

「50年前……。エリナさんは、大西洋の船上で夫のジョナサン・ジョースターを失っ

た。あなたのお爺さんを…。その時、エリナさんは、ひとりの女の赤ちゃんの命を救った。その写真の赤ちゃんは私です。」

「…ミナミが、そうじゃないかって言ってたからよ…。まさかとは思ったが…。本当にか？」

「ミナミの予想は当たってっただことですか、先生。」

「だって、目元と鼻筋が…。」

「続けます。当時、エリナさんに救われた私ですが…、エリナさんは身籠もっていた。そのため、ストレイツォに育てられたのです。」

「ストレイツォに!？」

「私が波紋を身につけたのは、ストレイツォから。そしてエイジャの赤石を受け継いだのも…。ストレイツォが、老いを気にして、カースが作りし石仮面の狂気に走ったのは残念ではありません。ジョジョ…、そしてそのストレイツォがあなたに倒されたのは…、複雑な気持ちがありますけど、仕方がない、運命だったのでしょうか。」

「なあ、姉ちゃん…。」

「いや…ここまで話したら、本人に察してもらわないと…。」

「おい、その双子ちゃん、なにヒソヒソしてるんだよん?。」

「いえいえ、なんでもありません!。」

「いやいや、ホント、マジで奇妙な運命だなくって思つて……。」「……ええ。実に奇妙な巡り合わせね。」

「そろそろ決闘を開始する！」

「どうやら、話はおしまいのようよ。」

カーズの合図を受けた吸血鬼達が、決闘場の準備を始めた。

サークルストーンの中央に巨大な炎が立ち上がる。

満月の月の光と、その炎の光に照らされ、サークルストーンの遺跡が明るく照らされた。

そして、なにやら、地響きが近づいてくる。

「なにになになになに!!」

「なんか来る！」

地響きは近づいてきて、それは、巨大な足音となって耳に響き始める。

それは……、馬だった。

巨大な。

「馬!?! デカ過ぎね!?!」

あまりの迫力。そして吸血鬼さえも踏み潰していく様は…、もはや怪獣だ。

ワムウとカーズの所に突っ込もうとしたその馬を、ワムウがひと睨みして、大人しくさせた。

「うむ、いい戦車馬だ。」

「この馬の脳には、石仮面の骨針（こつしん）を打ち込んであり、『吸血馬（きゆうけつば）』としてある。今より、この闘技場で…、ワムウとの戦い！ 古式に則った『戦車戦』を実施する！」

「戦車戦?!」

カーズの宣言により、観客でもある吸血鬼達が、沸き立つ。

ワムウワムウと、声援をあげる。

「この戦車に乗り！ この闘技場を戦いながら走り続ける！ ワムウ様か、貴様ら！ どちらがか振り落とされ、相手の戦車に踏み潰されるか！ あるいは、走りの途中で叩きのめされるか！ ゴールは“死”のみ!!」

吸血鬼のひとりが戦いのルールを説明。

「質問。この戦いのゴールが、死、だけなら、戦車がどうなろうと関係なし？」

「その通り！」

「場合によって、どっちの戦車もダメになって、降りて戦いになってもつても、あり

「？」

「その通り！」

「だってさ。」

質問をしたミナミがジョセフ達の方を見る。

「ちよい待ち！ 吸血馬だあ!!? それだとお前らの方の側の部下じゃねえのか!!? そんなところは！」

「心配するな。手綱には波紋が流れるようにしてある。ワムウは、パワーで馬を操るが…、お前達は波紋で操ればいい。」

カーズがそう答えた。

「なるほど…。」

シーザーが自分達の方へ来た吸血馬の手綱を掴み、そして波紋を流して大人しくさせた。

「問題ないぜ、軽い波紋で操れる。」

「そっか。で、どうするよ? 仗助は除外として、俺か、シーザー、どっちかが馬を操る必要があるぜ?」

「俺が馬を操る。体格と攻撃の多彩さじゃ、お前の方が上だ。」

「よっしゃ。で、仗助は、場合によっちゃ戦車の修理もしながら、スタンド…つてので、

攻撃と回復を頼むぜ。」

「はいっす。」

「……勝つぜ。ミナミが命がけで勝ち取った決闘の条件だ。勝つ以外にないぜ！」
ジョセフ達は、拳を合わせ、勝利を誓った。

「では、戦車戦を開始する！ スタートの合図は……あの雲の切れ目から、次に再び月の光が輝き出てきた時とする!!」

カーズの宣言により、観客の吸血鬼達が、ワーワー！とか、ワムウコールを送る。スタート位置に、二つの戦車が並ぶ。

一方はワムウがひとり。一方は、ジョセフ、シーザー、仗助を乗せている。

「ところでよお、ここ一周何メートルだ？」

「言う必要はない。なぜなら、貴様らは一周とせず、ワムウ様に潰されるのだからな。」
「チツ。ケーチ。」

「一周は960メートルだ。一分で一周できるだろう。」

吸血鬼の代わりに、ワムウが答えた。

「つてことは……時速60キロか……」

「それともうひとつ教えておく。」

するとワムウがこの戦いにおけるもうひとつのルールを教えてくれた。

それは、第一コーナーにある柱から武器がぶら下げられ、それを使い相手を攻撃するといふものだ。もつとも武器は周回ごとに一つしかないので、どちらかがたどり着いて取るしかないとのことだ。

そして、柱から武器を吊るす係の吸血鬼が柱に登って武器を吊るした。

「第一の武器は…、大型スレッズジハンマー！」

「うお！ いきなり大物だぜ！」

「ジヨジヨ、分かってるだろうな？」

「ああ、言われなくても。あれを取って、油を塗れば、波紋が通りやすくなって圧倒的にこっちの有利だぜ。」

「……お前達が、素晴らしい健闘（ナイスファイト）をしてくれることを期待している。」

「へん。楽しんでるな、ワムウ。」

「フフフ…、これほど胸が躍る戦いは、数千年ぶりだな。」

「そうかよ…。仗助。車輪の周りの石をどかさうぜ。」

「えっ？」

「発進の邪魔になるといけねえだろ？」

「わ、分かりました……。」

二人は戦車から一旦降りて、手分けして周りの石をどけた。

「ワムウ、おまえはいいのか？」

「ジョジョ、仗助！ もうすぐ月が出ます！」

「分かっているって！ 行くぞ仗助！」

「はいっす！」

二人は急いで飛び乗った。

直後、月の光と共にスタートの合図が放たれた。

が……。

「うおお?！」

ワムウの戦車が発進寸前で止まった。

「ああ！ 車輪の下にサークルストーンの石が!!」

それは、ジョセフが仕掛けた罠だった。

「うぬう、おのれ……、全員が月の光を固唾をのんで見上げている隙に、足下であんな小

細工を！」

「キタネー、野郎だぜ！」

「へへーんだ！ 先にも言ったがよお！ 俺らが対等に戦えると思うなよ!？」
ギヤーギヤーワーワーブーブーと声を上げる観客の吸血鬼達に、ジョセフがベロベロと舌を出した。

「やるとは思ったが…。」

「すげえつすね、ここまで来ると…。」

「おい、シーザー！ しつかり馬の操縦頼むぜ！」

「ハア！」

やがてワムウが強引に吸血馬のパワーで車輪を邪魔している石を吹っ飛ばしながら発進した。

「おお！ さすがだぜ、ワムウ！ けど距離は30メートルは差はつけたぜ！」

「ジョセフさん、もうすぐコーナーにさしかかるつす！」

「おう！ 握々してやるぜ！」

ニヤついているジョセフが、戦車から身を乗り出して、手を伸ばす。

そして第一コーナーの柱にある大型スレッジハンマーを掴んで…。

「うおおお!!？」

戦車のスピードと大型スレッジハンマーの重さに腕ごと身体を持ってかれそうになる。そしてその手から大型スレッジハンマーが離れそうになった時、仗助は咄嗟にク

レイジー・ダイヤモンドを出して、大型スレッジハンマーを掴むのを手伝った。

「あ、あぶねー！ 仗助か？」

「はいっす。その武器、ホントに振れるんっすか!？」

「やつるつきやねえのさ！」

手にしたスレッジハンマーに、油を塗り、ジョセフは、後ろに迫ってくるワムウを見る。

しかし、ワムウは、笑っていた。

「！」

「そのハンマーはくれてやる。最初からそのつもりだったからな。」

「なにい!？」

「貴様がハンマーを手に入れば…、俺は…。」

すると、ワムウが腕を伸ばし、ラリアットするように柱を破壊した。

そしてその柱を片手で掴み、持ち上げた。

「ゲゲツ!?! そう来るか!？」

「フフフフ！ この戦い、あくまでスピードではなく、いかに相手を馬や武器を利用して戦うか、そこに駆け引きがある。」

「ま、負けたぜ…、スケールだな。」

「ジョジョ！ 気負けするな！」

「来るっすー！」

「遅いー！」

次の瞬間、ジョセフがハンマーを振るよりも早く、それよりも太く大きな柱をワムウがジョセフ達の戦車に向かって振り下ろした。

「これで…、戦車を飛び降りざるおえなくな…、っ！」

「残念でした！ お前らが対等に戦えるだなんて思うなつての！」

潰され一旦仗助を抱えて飛び上がったジョセフとシーザーは、潰れながら、だが碎けた柱もろとも仗助のクレイジー・ダイヤモンドで修復されていく戦車に再び降りた。

「うおー！」

柱が、戻る力により、本来の位置に向かってワムウの方に移動する。

「ゴガンツ！ と片側の吸血馬の頭に当たり、戦車がぐらつく。」

「しまった…！ あちらには、あらゆるモノを直せる仗助がいたのだった！」

「そういうこと。」

リサリサの隣にいるミナミが、クスクスと笑った。

「ジョジョ！ スピードを落とすぞー！」

「あいよおー！」

シーザーの操作により吸血馬がスピードを落とし、一頭の吸血馬がグラグラしているため戦車も蛇行しているワムウに近づける。

「行くぜええええ!!」

波紋を伝導させたスレッジハンマーをジョセフが振りかぶった。

「……つくづく…驚かさせるぞ、その力…。しかし…。」

「おおおおおおお!」

ジョセフがワムウに向かってスレッジハンマーを振り下ろす。

直後、ワムウが消えた。

「!」

ジョセフがそれに気づいて一瞬攻撃を躊躇した直後、並行に並んだ吸血馬からワムウの手が飛び出し、石のかけらを仗助とジョセフ達の吸血馬に投げつけた。

「ドリアー!」

仗助は、冷静にそれをクレイジー・ダイヤモンドで弾く。

「! シーザー、スピードを!」

「必殺流法! 神砂嵐!!」

ニユツと吸血馬から出てきたワムウの両腕から放たれる、完全な形の必殺の攻撃が放たれる。

圧倒的な破壊の風が、スピードが落ちているジヨセフ達の戦車を襲う。

「ドラララララ！」

「仗助!？」

「風の軌道を戻すつす！　こちらとら、発射されるエネルギーを戻せるんすから、それくらいい…。」

「もとより…ソレが狙いよ。」

「なっ…!？」

次の瞬間、飛んできたのは、尖った岩の欠片、それが仗助の顔めがけて飛んできてため、仗助は咄嗟に手でそれを防ぐが、手を貫通する。そして、その手は、そのまま岩によって戦車に縫い付けられた。

「ぐあああああ！」

「仗助!！」

「手を封じてしまえば、直せまい!！」

「まさか必殺の流法をフリに使うとは!？」

「2週目の武器は…、鉄球のボーガン!!」

そして、そのボウガンは、大きい方と小さい方の二つあった。

「ジヨジョー！　次の武器を!!」

仗助の負傷に汗をかくシーザーだが、馬の操縦をしながら叫ぶ。

ジョセフは、仗助の手を貫通している岩を取ろうとして止まり、武器を取ることに専念した。

「どつちを取るかだつて？ 決まってるんだろ！ 大きい方だぜ！」

ジョセフは、大きい方のボウガンを掴んで取った。

照準をワムウの方に定め、弓を引こうとしたが……。

「ぐっ！ う、動かねえ！」

「クククク…… 欲張りい……！ 普通のボウガンでも滑車を使って弦を引っ張るほど強いのおお……！ ましてや特別製のアイアンボールボウガンの大きい方を選んでしまうと、欲張り者は損をするとはこのことよ……!!」

「この馬鹿！ おまえイソツプ物語知らねえのか!？」

「知ってるつーの！ けど、普通に考えりやでつかい方が有利って思うだろうが！」

「喧嘩……してる場合じゃ……。」

「ハッ！」

見ると、小さい方を取ったワムウが、戦車からこちらに照準を合わせていた。

そしてワムウの怪力で引かれた弦により、発射された弾丸にも等しいスピードの鉄球が……、仗助を狙った。

「させるか!」

仗助を守るためにスレッズジハンマーを盾にして鉄球を弾くが、その鉄球は、前にいるシーザーの頭上を過ぎ、ジョセフ達の吸血馬の一頭の頭を貫き砕いた。

「しまったあ!!」

シーザーは、シャボンカッターで咄嗟に頭を潰された一頭を切り離し、もう一頭だけの力で戦車を引かせる。

「ぐっ……く……!」

ジョセフは、必死に弦を引こうとしている。だがびくともしない。

「俺も……手伝うっす!」

「馬鹿野郎、お前、手……。」

「スタンドで掴むっすよ。穴は空いちまったが……、スタンドのパワーなら……。」

「……仗助、せーので行くぞ。」

「はい!」

仗助は、クレイジー・ダイヤモンドを出し、ジョセフが手にしている大型ボウガンの弦を掴む。

「……いけそうっす。」

クレイジー・ダイヤモンドのパワーにより、キリキリとゆつくりと弦が引かれる。

「せーの！」

ジョセフの合図と共に、引かれたボウガンから大型の鉄球が放たれた。それをワムウは、小さめのボウガンの鉄球を発射し、軌道を逸らす。

「外したー！ ギャハハハハ！」

観客の吸血鬼達が笑う。

「ヴァーカ。計算尽くだよくん。」

「ハッ!？」

外れた軌道には、シャボン玉があつた。

そして鉄球が振れた瞬間、波紋を含んでいるシャボン玉が爆発するように破裂し、大型鉄球が弾かれ、ワムウの頭部に命中した。

「ぐ、お！」

「き、キタネー！ 騎手が手を出すなんて！」

「シーザーちゃんをただの騎手だなんて思ってたのは、そつちだろおん？ 俺ら三人がワムウと戦うってことになってたはずだぜ！」

ブーイングを上げる吸血鬼達に、ジョセフが中指を当てて挑発する。

ワムウは、頭を押さえ、戦車の上で片膝をつく。

「もう一丁！」

「はいっすー！」

ジョセフと仗助により弾を再装填され、弦を引かれた大型ボウガンが狙いを定めようとして…。

すでに発射されていたワムウのボウガンの鉄球が迫っていた。

「うおお!!」

咄嗟に身をのけぞらせジョセフが避けると同時に、最後の1頭であった吸血馬の頭部を鉄球が貫いた。

すべての吸血馬を失い、急激に失速した戦車が前に倒れ、ジョセフ達が跳ね飛ばされる。

仗助の手は、その際に抜けたが、三人は、むき出しの石の上に投げ出された。

「先ほどの…、失態は…なまじっか『視力』に頼ったからだ…。ならば…。」

「…ワムウ。」

「なにを!？」

次の瞬間、ワムウは、両の目を自ら指で潰していた。

そして、額から、太いドリルのような角を出した。

「これからは、この角で、風を感じ！ 貴様らを仕留める！」

「まさか、そんな…！」

「ジョジョ、来るぞ！」

「仗助！ 俺の背中に！」

「！」

「シーザー！」

「おう！」

ジョセフが叫ぶと同時に、仗助はジョセフの背中にしがみついた。

迫ってきたワムウの吸血馬をつなげている馬具に、ジョセフがスレッジハンマーを引っかけ、それを横からシーザーも掴み、同じ動きでハンマーを軸にして回転させ、同時に吸血馬に乗った。

「へへーん、ナイスよ、シーザーちゃん！ 俺の考えにようやくついてくるようになつたね。」

「うるせえ！」

「接近したことを…後悔しろ！」

「シャボンランチャー！」

四方八方に飛ばされたシーザーの波紋のシャボン玉。

だが、それをワムウは、持っているボウガンの砲身ですべて割った。

「視界を封じた、この俺に死角などない！」

「ドララララ！」

仗助がジョセフにしがみついたまま、クレイジー・ダイヤモンドの拳のラッシュを放つ。

それをワムウは、片手でいなす。

「そ、そんな！」

「見えぬからこそ！ 感じたぞ！ その力！ ジョースケ貴様の背後にある力を！」

「…けど、俺の力を忘れてるぜ。ワムウさん。」

「！ ハッ!？」

ワムウの目が治る。

そしてつい開いてしまったまぶたの下の目が捉えたのは、眼前で大型のボウガンの鉄球を発射する直後のジョセフだった。

「神砂……！」

「その腕じゃ、遅いぜ!!」

「！」

先ほど仗助の攻撃をいなした腕が、僅かに変形していた。その腕は、仗助によって変形させられたのを治した方で、仗助が変形状態の時の状態に少しだけ「戻した」のだ。

それを見て、遺跡での恐怖を思い出してしまったワムウの動きが鈍る。

そして発射された、大型のボウガンの鉄球が、ワムウの胸部に大穴を空けた。

波紋の力を帯びた鉄球による攻撃で、ワムウは、大穴が空いた身体を戦車から落下させた。

「……、このワムウが……、1万と2千年以上もの間生き続けてきたこの身が……」

「生物つてのは、トラウマつてのを教訓に進化するんだよ？　長いこと天敵らしい敵もいなくなつて頂点でふんぞり返つてたのが仇になったね？」

「……ぐっ！」

ミナミの言葉に、カーズが唇を噛む。

「お前の負けだけぜ、ワムウ。」

「苦しまないよう……、トドメをさす。」

「……このワムウは……。」

「？」

「敵を……楽に……、勝たせる趣味は無い!!」

シューシューと胸の穴から溶け始めているワムウの身体に異変が起こった。

「受けた傷も、我が肉体！　今までのダメージも、我が力！　全てを利用し……勝利を掴む!!」

「ワムウ!？」

「ハッ!?　ジヨ……」

察したシーザーが叫ぼうとした直後、二人の喉に、ワムウから発射されたワムウの両の手が喉に食い込んだ。

ジヨセフから落ちた仗助は投げ出され、サークルストーンの中央の炎の所まで吹っ飛ばされた二人を見た。

「そして、我が……風の最終流法（ファイナルモード）!!」

ワムウの身に周囲の全ての風が集まり出す。

「やめろ、ワムウ！　それだけは、やめるのだ!!」

カーズがたまらず叫ぶ。

「ごうごうと風を集まっていくな。」

それとともに、ワムウの胴体から生えてきた筒のようなモノに風が集まり……まるで生き物のように蠢く。

それは、炎の下の壁に縫い付けられた二人に向かって振り下ろされようとした。

「最終流法！　『渾楔颯（こんけつさつ）』!!」

ワムウは、身体を徐々に崩しながらも最後の技と共に叫ぶ。

「ぐああああ!!? か、身体が、切れ…。」

うねる、いわゆる烈風のメスが、ジョセフとシーザーを切り刻む。

身体が崩壊させながらのソレは、うまく命中しないのか、闇雲のようだ。

「ジョセフさん、シーザーさん!!」

「仗助、行ったらダメ! あなたが倒れたら…!」

「けど、このままじゃ…!」

「死ぬ前ならいける! 考えなさい!」

「考えるたって…、ハッ!」

仗助は、そこで考えつく。

そして、地面に大量に垂れているワムウの血のついた石を拾った。

「ジョースケ…、貴様は、最後に殺すでしょう…。この腕の恨み晴らすため!」

「……赤石は…。」

そして仗助は、赤石の欠片を取り出した。

「エネルギー増幅装置!」

「!」

「自動追尾弾だぜ!!」

ワムウの血を混ぜ合わせ再形成されたエイジャの欠片が、目に見えぬほどのスピードでワムウの体内に吸い込まれた。

ワムウの体内で暴れているジョセフの波紋の力を受け、エイジャの欠片が暴走を始める。

「お……!! ぐ……」お、おとおおとおおとおおとおおとおお!!」

最終流法により崩壊を始めていた身体が体内から爆散した。

「……へ、へへへ……さ、さすが、俺の……息子……」

「あー……確かに、おめえの血を感じるぜ……スカタンが……」

手足も胴体もすでにボロボロで使いものにならない状態で虫の息の二人に、仗助が駆け寄り素早くクレイジー・ダイヤモンドを使って治療した。

「……フフフ……。俺は……最後の最後までお前に負けていたということか、ジョースケ……」

「ワムウ……」

「お前に……あの時……腕を変形させられた時の恐怖……今日まで忘れたことなどなかった。あれほどの恐怖を、俺は知らない……。人間とは……知らぬ間にこれほどに力を付けているものなのだ……悔っていた俺の負け……だ……」

「俺は……」

「知っているさ。お前達が、未来から来たことを……。」

「！」

「カーズ様は、それを知っている……。だがお前達は……、俺達のことを知らなかった……つまりは、そういうことだ。だからこそ覆す方法を模索したのだ。我々の悲願が達成させられたなかったという運命を……変えるには、やはり、究極生物になるより他なかった。だからこそ、俺は、あえて受けたのだ。この身が滅びることも承知の上で、何が何でもお前達を退け、カーズ様に、エイジャの赤石を……。」

「もう……喋らなくていいです。」

「かくも恐ろしいものだな……運命という見えぬ力とは……、だからこそ、我々は勝利を……。真なる意味ですべての生命の頂点を……。だが、俺は、満足だ……。強者と戦い、そして散ること……、それだけが我が真理……。ジョジョ……、シーザー……、そしてジョースケ……おま、え……達と……戦えて……、本望だ……つたぞ……さ、らばだ……。」

ワムウの首は完全に溶け、風に乗って消えた。

「……さよなら。」

仗助は、風の吹く光景を見上げて眩き、そしてジョセフとシーザーもその風を見つめた。

究極

「さて……、もうあなたひとりだけだぞ?」

「……ワムウは……、奴は戦闘者として、あまりにも純粹すぎた! それが弱さにつながったのだ! 残りはこのカーズひとり! だが頂点に立つのは、常にひとり!」

カーズが頭に巻いていた布を取り去り、ウェーブのかかった髪の毛と、特徴的な角を見せた。

「カーズ様! わざわざ、あなた様のお手を煩わせるわけにはいきません! ルール無用! やはり我々がこいつらを……!!」

「あれ? あなた達が、こつちと対等だなんて思わない方がいいって言わなかったわけ?」

「!、ぎ、ぎやあああああああ!?!」

足下から生えてきた鮮血色の植物の根っこに捕まり、傷つけられた端から身体が崩れ、吸血鬼達は騒然となった。

崩れた端から青いバラの花が咲き、散らばる。

「うああああ!?! なぜじゃ、なぜだ……!?! 俺らの身体が勝手に崩れて……!?!」

「ひいひい！ お助けをー！ー！」

「かー、情けねえな。手足ぐらいで…。」

「しかし、クズしかないようだな。どいつもこいつも。」

「姉ちゃん…。」

怪我は完治したものの、消耗した体力は戻せないため、余裕な顔をしているもの。実際にはかなり疲れているジョセフ達。仗助に至っては、手に穴が空いているのだ。

「さてさて…、約束通りワムウとの戦いをさせてもらって、こつちの勝ち。ここから先は…。」

「1対1での決闘はどうかね？」

「えっ？」

思わぬカーズからの提案にミナミ達はびっくりした。

「ジョジョ達は、ワムウとの戦いですでに疲労困憊だろう。ならば、戦いに参加していなかった、そのエイジヤの赤石を持つ女が戦うべきではないか？」

「リサリサさんと？」

「いいでしょう。そのつもりでした。」

「先生！」

「シーザー、あなた達は十分よく頑張りました。ここからは、私に任せなさい。」

「いよ、先生、あんがと！」

「…リサリサさん、油断はしないでくださいっす。」

「仗助。あなたは、ジョジョ達から波紋治療を受けなさい。それで少しは傷も塞がるでしょう。」

「俺の目的は、あくまでも赤石！　しかし、エシテイシとワムウは、1万年以上も共に生きた仲間！　彼らの死と誇り高い戦いへの思いを貫き通す必要がある。」

「とかなんとか言って…。」

「くだらないと思うか？」

「ううん。そんなことはないよ。」

「ミナミから指摘を受ける前に、カーズが言ったので、ミナミは肩をすくめて首を振った。」

「ついて来い。あそこだ。」

カーズが顎で示した先は、遺跡だった。

「ピッツベルリナ山神殿遺跡！　闘技場ではないが、立体的な戦闘が楽しめるだろう。」

「先生…、やはり、ここは俺が…。」

「シーザー…、あなたの気持ちはよく分かります。ですが、20代そこいらの小僧から

いたわれるほど、柔な人生は送っていない！」

「さっすが、50歳。」

「……。」

「姉ちゃん…、どう思う?」

「なんか、嘘くさい。」

仗助とミナミがヒソヒソと話し合った。

そして、遺跡の足場の悪い柱に、カーズ、そしてリサリサが立つ。

「俺には、流法『輝彩滑刀(きつさいかつとう)』がある。お前には、武器を与えねば、ワムウの誇り高い意志を穢すことになる。その好きな武器を選べ。」

「必要はない。この自分のマフラーだけで十分。」

そう言つてリサリサは、用意された武器を蹴落とした。

「そうか…。では、来い！」

「やっぱり…、妙すぎる…！」

「姉ちゃん！」

するとミナミが、指揮者のように指を遺跡へ向けた。

一方リサリサは、殺気のないカーズの攻撃に困惑した。

だがりサリサは、波紋の達人。人生経験と戦いの経験値は、ジョセフとシーザーを

遙かに上回る。

そして彼女武器は、波紋のマフラー。

死角からの攻撃を彼女は見事にマフラーを使って避け、マフラーに流した波紋を用いしカーズの頭部に波紋を込めた蹴りを入れた。

カーズは、たちまち溶ける。

だが……。

スタツと立ったりサリサリの胸に、カーズの腕の刃が背中から突き抜けた。

「せんせー……!!」

「フン！ くだらん！ 1対1の決闘なんてなあゝゝゝ。このカーズの目的はあくまでの赤石！ あくまでも究極生物になること！ ワムウのように戦士になるつもりもなければ、ロマンチストでもない。どんな手を使おうが……、勝てば……。」

「だろうと思ったよ。」

「はっ!？」

気がつけば、遺跡全体がブルー・ブルー・ローズの鮮血色の根っこに覆われていた。

「や、野郎……！ やつちまえ、ミナミー……!!」

ジョセフの絶叫に呼応したのか、ブルー・ブルー・ローズが一斉にカーズに襲いかかろうとする。

カーズは、咄嗟にリサリサを掴み、自身の盾にした。
すると、ブルー・ブルー・ローズが止まった。

「ハーハー……！ ええい、この植物を見るとなぜか汗が止まらない！ 究極の生物になれば……こんなものになど……！ 吸血鬼共！ 早く、コレを操るミナミを殺せ!!」

「……う……。」

「ミナミ!？」

「姉ちゃん。もう限界だ！ ブルー・ブルー・ローズを引つ込めさせないで！」
「だ、ダメ……。で、できな……。い。」

ミナミは、出した方がいいが、ブルー・ブルー・ローズを消すことも動かすことも出来なくなっていた。

体力や精神力がガリゴリと削られる感じに、ついにミナミは、両膝をついた。

「ジョジョ、仗助！ 行け！ 俺がここを食い止める！」

「シーザー！」

「シャボンカッター！ 連射ああああ!!」

凄まじい数のシャボン玉のカッターが襲いかかってくる吸血鬼達を切り裂き溶かす。

仗助は、ミナミに肩を貸して立ち上がろうとしてふと気づく。

近くにある平らな岩が…、カーズがいる遺跡の素材に似ていると。

「ジョセフさん！ その岩を使います！ 乗ってください！ 走るよか早いと思うっす！」

「お、おう！ 頼むぜ！」

「ドラララララララ！！」

岩に乗った三人。そして仗助が岩をクレイジー・ダイヤモンドで殴ると、遺跡の一部であったその岩が浮遊し、猛スピードで三人を乗せたまま遺跡の方へ移動した。

「……フツ。そんな方法で移動するか。だが、こちらに来ることは分かっていたぞ。」
するとカーズは、リサリサの足を腕の刃で貫き穴をあけた。

「てめえ!？」

そして岩から飛び降りた三人の前で、その足にロープを通し、リサリサの身体を放り出した。その結果、リサリサが足を貫くロープで宙ぶらりん。

「先生……！」

シーザーは、息を切らしながら、今だ凄まじい数いる吸血鬼を相手にしていた。

だがワムウとの戦いで体力が戻っておらず、徐々に波紋呼吸さえ練れなくなっていた。
ていた。

波紋のシャボン玉の威力は弱まり、吸血鬼に致命傷を負わせられなくなっていた。

「くそ…、こんなところで…！ 父さん…爺さん…!!」

シーザーは、襲いかかってくる吸血鬼達を前に、グツと目を閉じた。
その時。

凄まじい光が、丘の上から照らされ、それを浴びた吸血鬼達がたちどころに溶けていった。

「！」

「吸血鬼共！ このシュトロハイムと、ナチス親衛隊が相手だ！」

丘の上から現れたのは、シュトロハイムと、紫外線照射装置を身につけたナチス軍隊だった。

「シーザー！」

「ジョジョ！」

「我ら、SPW財団特別科学戦闘隊もいるぞ!!」

「スピードワゴンさんも…。」

「およ？ ありや、ニユーヨークのスモーキーじゃねえか？」

柱の上からジョセフは、その姿を確認した。

「それどころじゃないっす!」

「リサリサさん!」

「さて…、これをどうすると思う?」

「ハッ!」

ジョセフがハツとし、次の瞬間、カーズがリサリサと繋がったロープを離した。

「この、クソ野郎がー!」

ジョセフが駆けつけて、ロープを掴んだ。

「クククク…!」

ジョセフが来ると同時に、カーズは飛び退いた。

「仗助…、お前の攻撃は自分の傷は治せず…そして距離が短い…。ミニミ、お前のこの根っこだけが今、我が障害となっているが…、その様子だとコレを維持するのは相当な負担がかかると見た。」

「…ぐっ…。」

「お前達が力尽き、その女を失うのが先か、この私の刃がお前達を切り刻むのが先か…。賭けないか?」

「最悪っす!」

「カーズ! てめえの根性は、畑に捨てられ、カビがはえてハエもたからねーカボチャ

みてえに腐りきってやがるぜ!!」

「わめくがいい、ほざくがいい。ロープを掴んでいる貴様にできることはそれだけだからな。」

「ドララララララ!」

「ククク! こう狭い場所では、距離さえ測ればどうにでもなる。さて、問題だ。この下は水晶の岩盤となっている…。リサリサや、お前達が落ちたらどうなるかな?」

「言われなくても分かるわ、ボケ!!」

「はあ…はあ…!」

「姉ちゃん…!」

消耗しているのに対し、ブルー・ブルー・ローズは、思ったように動かない。

「消えるのも時間の問題と見た。この根っこ共が消えたら、攻撃に移るとしよう。」

「こんちくしょうが!」

「まったく足癖の悪い男だ。だが、ロープがあつては、この程度の動き。」

カーズが受け止めたジョセフの足を、カーズが切りつけた。

「ぐあ!」

「ジョセフさん!」

素早く仗助が傷を癒す。

「痛手は治せるが…失った体力までは戻れないということか？」

カーズは、クスクスと笑いながら分析する。

やがて…、ブルー・ブルー・ローズが消えた。

「う…。」

ミナミは、がっくりと項垂れていた。

「フフ、ククク！ では、宣言通り攻撃に移ろうとするか。」

カーズが近寄ってくる。

「私がこの遺跡を指定したのは、単なるフリだとも思ったか？ お前達と戦うことも考えに置いておいたのだぞ？」

「なるほど…、確かに…仗助の攻撃の距離を測るには…これほど良い場所も無い…でも…。」

「？」

「あなたは…、やっぱり…私達より優位に立ってるだなんて…思わないで。」

「ハッ!? しまっ…。」

ジョセフが手にしているロープから突如生えてきたブルー・ブルー・ローズの根っこが、接近していたカーズの左目を貫いた。

「シーザーさん…ありがとう…。怖くて…盲目になってたからこそ、見えなかったモ

ノが…今…分かる。」

「おおおおおおおおお！」

ブチブチメキメキと、貫かれた左目から凄まじい数の青いバラの花が咲いて落ちる。

「波紋疾走!!」

「ドララララララララララララララララ!!」

顔を押しさえているカーズに、容赦なくジョセフの攻撃と仗助の攻撃が喰らわされた。

カーズの腕の刃が折れ、そして体中ポコポコにされたカーズが、落下していった。

そして、引つ張り上げたリサリサを、仗助が治療。

「う…うう…。ジョジョ…?」

「リサリサ先生!」

「リサリサさん…、よかったあ…!」

「カーズ…は? ハッ! 赤石が!」

「あつ!」

下を見たとき、そこには、ナチス軍が水晶の岩盤の上に串刺しになって呻くカーズに、トドメを刺そうとするところだった。

「……」

ジョセフ達は見た。

カーズの顔に、赤石がはめ込まれた石仮面が被せられていることに。

そこに、凄まじい紫外線照射装置の光がカーズに浴びせられる。

「しまったああああああああああああああああ!!」

だが、遅かった。

紫外線を吸収し、エネルギーを増幅したエイジャの赤石が石仮面に流れ、石仮面から飛び出した骨針が、カーズの脳を貫く。

そして……。

石仮面がバラバラに砕けて落ちた。

カーズがあり得ない体勢から起き上がる。

すると、ふと、近くにいるリスを見た。

そして右手を上げる。

すると右手がみるみるうちに、リスへと変形し、別のリスの方へ移動した。

「な、なんだ？ やばい、何かがやばい！」

「気をつけてください!!」

だが遅かった。

カーズの手から生まれたリスは、別のリスを食い殺し、そして近くにいたシュトロハイムの腹部を貫き、さらに、その向こうにいたナチス軍人を襲ってその表面をまるでもぐらが掘ったみたいに抉ってしまった。

そうして、カーズの手から生まれたリスは、再びカーズの手に戻り、今度は花の形になり、そして次にチヨウチヨの形になる。

やがて…太陽が昇った。

「フフ…フハハハハ、ハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

カーズが太陽を背に笑う。

「なんてことだ…! 究極の生物とは、あらゆる生命の、全ての能力を身につけ、全ての生命を兼ねる!! そして、あの美しい、なんとという輝き!」

戦慄したスピードワゴンが震える声で叫ぶ。

「ハハハハハ! ついに…ついに、太陽を克服したぞ!!」

「奴に弱点は、もうない!! 不老不死、不死身! 誰も倒せない!! 究極の生命体、カーズの誕生だー!!」

「それ、どうかかな?」

ジョセフに背負われ、駆けつけてきたミナミが、冷静な声で言った。

「あなたは…確かに頂点に立った…。けれど、分かっていない。」

「……フンツ！ 負け惜しみを…。」

「じゃあ、どうして？ 汗をかいているのかなあ？」

「ハツ!?!」

「なにーローロー!?!」

カーズどころか、周りがびつくりした。

究極の生命体となったカーズが、あきらかに汗をかいているのがハッキリと見えたからだ。

「ねえ、カーズ。あなたは…、究極に…間違えた。」

ミナミがジョセフの背から降り、袖から生えたブルー・ブルー・ローズの根っこを見せつけるようにした。

根っこがシュルツと僅かに動いただけで、カーズがビクツとなった。

カーズは、自分の反応に驚き動揺する。

「……………好きに…しなさい。」

ミナミが、そう言葉にした瞬間、辺り一帯にブルー・ブルー・ローズが出現した。

頭の回転が良いジョセフは、確信した。
ミナミならば、あの究極の生命体に勝てると。

究極にして、最弱とは…

ブワツと出現した、ブルー・ブルー・ローズ。

それを見たカーズの顔や身体から、ドツと汗が流れる。

「なあ〜にが究極だ！ こんな根っこ程度がこええつてどうなんだよ！」

「じゃ、弱点が…あるのか!? あの突然現れた血のような赤い植物の根っこが…!?」

「ぐ…、くううううう！」

「あつ！」

するとカーズが両腕を巨大な鳥の翼に変えて飛び立った。

「逃がすかー！！！」

シーザーがシャボンカッターを繰り出す。

「撃ち落とせー！！！」

シウトロハイムが、弾丸による攻撃を指示した。

皆が、気づいた、理解した。

あの鮮血色の植物の根っこに、カーズが…、究極の生命体が怯えているという事実

に!!

カーズは、頭部から生やした長い触覚で、シャボン玉のカッターを割り、そして自身を貫かんと撃つてくる弾を気にせず飛ぶ。

地面を走るようにブルー・ブルー・ローズが移動する。カーズを追って。

「おい、スピードワゴン爺さん！ 飛行機あるか!？」

「軍用機なら…。」

「よっしゃあ!」

「待て！ ジョジョ！ 勝てるのか!? 勝機はあるのか!？」

「あるとかないとかじゃないぜ！ 勝つんだよ!!」

「ジョセフさん、急いでくださいっす！ 姉ちゃんの身体がもつまでに!」

仗助の腕の中で、ミナミはぐったりと目を閉じていた。

その髪の毛が徐々に白髪が増えていっていた。

「ありがとよ…。ミナミ…。お前の力が…、世界を救うんだ。」

ジョセフは、振り返り、ミナミに駆け寄って、その額にキスを落としてから走り出した。

「ハア…ハア！ なぜだ!?! 私は、なぜ!?!」

カーズは、自問自答する。

なぜ究極の生命体になったにも関わらず、変わらず…いやむしろ悪化した状態でブルー・ブルー・ローズを恐れているのかを。

自分は、究極だ。

不死身だ。不老だ。

そしてすべての生命の頂点に立ったはずだ！つと。

なのにあんなチャチな植物の根っこなんぞをなぜ恐れるのだと。恐れるモノなど、もはやこの地球上に存在しないはずだと。

その時、カーズを覆う巨大な影上からきた。

『あーあー、こちら、ジョジョだぜ！ 逃がすかよお!!』

マイクからジョセフが軍用機を操縦しつつ、挑発的に言う。

「ぬうううう！ だが貴様ごときに私を…。」

『撃ち落としてやるぜ!』

ジョセフは、軍用機の機関銃の照準をカーズに合わせた。

「馬鹿が！ ミナミはともかくとして、波紋使いごときが今更！」

発射される機関銃の弾を、アルマジロのように硬質化させた自身の羽で防ぎ、なおかつ硬くさせたその羽を弾丸のようにお見舞いした。

ジョセフが乗る軍用機の窓やドアなどにドスドスと硬質化した羽が突き刺さり、窓

が破られる。

ふいに軍用機が低空飛行になったため、カーズも同時に低空飛行になる。すると、その下にカーズを追っていたブルー・ブルー・ブルー・ローズが生えてきているのにカーズが気づいた。

『捕まえろ、ブルー・ブルー・ローズ!!』

「ちiiiiiiii!!」

地面すれすれまで軍用機が低空飛行しカーズを上から威圧し、それより地面に近いカーズに向かってブルー・ブルー・ローズが迫ろうとする。

愚カ

「ハッ!」

脳に響くような不気味な声に、カーズは鳥肌が立った。

オマエは、愚カ

「だまれえええええ!! この究極生命体となったカーズを愚弄するな!!」

究極トは、……永遠トは

その時、カーズだけじゃなく、軍用機をも覆うような巨大な影が現れた。カーズもジョセフもつい見上げてしまった。見上げるのでは…、なかった…。

「う……、うわあああああああああああああああああああ!」

ジョセフの悲鳴が物語っている。

巨大な骸骨。

それに絡みつく鮮血色の植物の根っこ。

それは、恐怖と絶望の権化のような、途方も無いモノだった。

ソレの右手が上がる。

「ひっ!?!」

もはやカーズは、全身の細胞という細胞が上げる悲鳴に従うより他なかった。

そしてその大きさからは到底考えもつかない凄まじいスピードで振り下ろされ、軍用機はおろか、その下にいたカーズを地面にその手で叩き付ける。

軍用機が爆破し、カーズもそれに巻き込まれる。

「ジョジョー！」

「…サンキュ…、シーザー…。」

爆発する軍用機からジョセフを救い出したのはシーザーだった。

岩の上へ引つ張り上げられ、その下でもうもうと燃える軍用機と、それを押さえつけるように右手を降ろしている骸骨の怪物。

「……仗助から聞いたぜ…。あれが、どうやらブルー・ブルー・ローズの本性らしい！」

「これが!？」

ジョセフは、信じられんと声を上げた。

あの鮮血色の植物の根つこの絡まる巨大な骸骨こそが、ミナミの力の全容だったなら……。

「ミナミ…、アイツなにを背負ってんだよ?」

明らかに人智を越え、究極となった生命をも脅かすソレは……。

例えるならば……。

カーズの方を、ブルー・ブルー・ローズの本性が見る。

そして再び右手を上げる。

「私は、究極だ……！ あの太陽を克服したのだ!! 私は、神のごとく、この世界を……」

「その神が……、そのデカイ骸骨に怯えきってるんじやねえよ!!」

ジョセフは、切斷された左手部分を押しえながら叫ぶ。

「だまれえええええ!!」

「シャボンランチャー!!」

シーザーが渾身の波紋のシャボン玉を発射する。

だが……、もはや太陽を克服したカーズは、何事もなくシャボン玉を割る。

カーズは、フー、フー……と、荒い呼吸を繰り返していた。

鳥の翼になっていた両腕が、ひな鳥のような産毛に変わり、やがてカーズの腕に変わった。その間にも、ハラハラとソメイヨシノの花と、青いバラの花が咲いて落ちた。

「せめて……」

すると、右手を上げたブルー・ブルー・ローズがその手を振り下ろそうと構えた。

「貴様らだけは道連れにいいいいいいいいいい!!」

波紋の力を手にしたカーズがジョセフとシーザーに襲いかかる。

それを、ジョセフは、拾っていたエイジャの赤石を盾にして防ぎ、波紋を吸収した

エイジャの赤石から放たれた巨大なエネルギーが、ブルー・ブルー・ローズの本性に当たった。

それとともに、目に光の無かった、ブルー・ブルー・ローズの本性の空いた両目にボツと灯が灯る。

「させるかああああ!!」

胴体に大型機関銃を装備したシウトロハイムが、カーズを背中から撃った。

カーズは、身体を硬化させようとしたが、硬化が上手くいかなかった。

粘土のように、中途半端に硬く柔らかくなつた背中に、大型機関銃の弾丸が突き刺さり決る。

「な、なぜ…? 私の…身体が…!?!」

自分は、究極の生命としてすべての生命の力を得たはずだ。

それが、なぜ発動しない?

「あなたは…、愚か。」

その時、ミナミの声がカーズの耳に届いた。

「生命の究極とは……、もつとも弱いモノの称号でもある。」

次の瞬間、声に気を取られたカーズを、ブルー・ブルー・ローズの手が捕えて持ち上げた。

ハラハラとソメイヨシノの花びらと、青いバラの花が落ちていく。

「あなたは……、究極を履き違えた。」

「お……、うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!」

仗助に背負われたミナミの青い目と目が合ったときには、カーズの身体が、ブルー・ブルー・ローズの口が喰った。

カーズは、生命の歴史の放流とも呼べるような場所に放り出された。
抗おうと暴れるが、流れに逆らえない。

どれほど力んでも身体は変化しない。

どこまで続くか分からない放流の中、やがてカーズは、手足の動かし方を忘れ始めた。

そして胴体の生命活動も……、そして…最後には…それを考えることが出来る頭脳さえも使い方を忘れた。

そして放流の中で、カーズの身体が、シユレッダーにかけられた紙くずのように崩れ、放流に溶けるように消えていった。

太陽が高く上がる頃。

ブルー・ブルー・ローズの本性である骸骨の怪物は透けていき、やがて消えた。

「か、カーズは？ ハッ！ ジョジョ!!」

スピードワゴンが、シーザーとシユトロハイムに肩を貸されて歩いてくるジョセフを見つけた。

「カーズは、どうなったの!? 勝ったの!？」

スモーカーが聞く。

ジョセフ達は神妙な顔をしていた。

そして、ジョセフは、地面に座り込んだ。

「……分からねえ…。」

「分からないとはどういうことだ!？」

「分からねえもんは分からねえんだよ!」

ジョセフが右手でガシガシと頭を掻いた。

「ジョセフさん!」

「仗助?」

「姉ちゃんが…。」

「!」

それを聞いたジョセフとシーザーは、ミナミのところへ駆け出した。

そこには、リサリサが必死に波紋の生命エネルギーを流し、すっかり白髪になってしまったミナミに治療を施そうとしている光景があった。

「ミナミ!」

「先生!」

「……死なせはしない！」

リサリサは、自らの命を明け渡す最後の波紋の技、深仙脈疾走（ディーパスオーバードライブ）を使っていた。

しかし、ミナミは、目を覚ますどころか、呼吸している様子が無かった。

「馬鹿やろー！ー！！」

「ジョジョ!？」

ジョセフは、ミナミの反対側の手を右手で掴んだ。

そしてリサリサ同様に波紋を流し出した。

「やめろ、ジョジョ、その身体じゃ!!」

「うるせえー！ー！！」

スピードワゴンが止めようとするが、ジョセフは止めない。

シーザーも横から加わり、手を握って波紋を流した。

「ミナミ…、お前…最初から…！ 最初からこのつもりで!？」

「姉ちゃん…、そういう人…だから。」

「泣くな!!」

仗助は泣き崩れるが、ジョセフが叱咤した。

「過去がどうだとか、未来が変わるとかんなもんは、関係ねえんだよ！ 今ココにある

新しい未来も、未来の娘だからって失ったら無意味なんだよー!! 目え覚ましやがれ、ミナミーロー!!」

ジョセフの涙が目を覚まさぬミナミの顔に降りかかった。

「……………」

「ミナミ!」

「……………あ…、シーザー…さ…。」

すると大量の青いバラの花の束を、ブルー・ブルー・ローズが持つて来た。

「これ……………だけ…あれば……………いいよね?」

「ああ…、ありがとう。十分すぎるぜ。」

「よかった……………」

ミナミは、消えそうな笑みを浮かべた。

「で? 結局のところ、カーズはどうなっちゃったんだ?」

目を覚ましたミナミを新たに手配された軍用機で搬送中の軍用機の中で、治療を受けながらジョセフが聞いた。

「……この世で…、もつとも最強で、最弱の存在になっちゃったよ…。」

「さいきょうで、さいじやくくくく？」

「それはつまり、カーズは生きていると?！」

スピードワゴンや、シウトロハイムが驚愕する。

「カーズは、この地球で最も究極の生命の意味を履き違えた…。だから…、柙を正しただけ。」

「カーズは、どこへ!？」

「……どこにもいる、でもどこにもいないかも…。」

「?」意味が分かんねえ。」

シーザーが頭を捻った。

「生命…の定義って…、難しいと思うんです…。でも、この地球で最初に生まれたのは…、ただのタンパク質のような遺伝子の先駆けだったみたいですよ?」

ミナミの言葉に、全員が首を捻る。

「……どこにもいるけど…、どこにもいないかもしれない…。私は…そう思ってます…。」

「だからカーズは……？」

「……………私が……………究極で、最弱だと思う命……それは……………、ウイルスや細菌だと思つてます。」

「!」

それを聞いて頭の回転が良いジョセフは、察した。

カーズは、ミナミが考える、地球上で最も究極に強く、だが最弱な命(?)といえる、ウイルスとか細菌などの極小の存在にまで進化を遂げてしまったのだ。

「いや、退化か？」

「進化と退化って……、紙一重だと思ふんです。」

「ウイルスとか細菌だと……!? では、あの場にいた我々はすでに……。」

「けどどうやって見つけるんですか？」

「なに!?!」

「知ってます? 人間ひとりの大腸の中だけでも、500兆以上の細菌が住んでるって言われているんですよ? あの場にいた私達の髪の毛の先から爪の先まで……。隅々まで顕微鏡で一匹も逃がさず、カーズを見つけ出せるんですか? それと、岩やそこらの地面も含めて……。」

「ぐっ!」

「そんな…極小の存在に…。しかし進化されたら、また究極の生命体として君臨するのでは!？」

「それは、たぶん…もう無理じゃないですか?」

「仗助?」

視線が仗助に集まる。

仗助は、手の中で、カーズから落ちたソメイヨシノの花びらを弄んでいた。

「ソメイヨシノの花つて知ってます? いわゆる桜の花つすけど…、別名クローン桜って呼ばれるんですよ。種から育たず…、人の手を使わないと増えることもできないです。」

「それがなにか…?」

「カーズは…、たぶん…もう…、自力じゃ増えることも、進化することも出来なくなつた可能性が高いってことつす。」

「あ、あの究極の生命体がか!？」

「…:…:シーザーさんのおかげ…。」

「俺?」

「怖がつてたからこそ、盲目になってたから…、怖がらなければ、ちゃんと見えて感じられるようになった…、ブルー・ブルー・ローズのもうひとつの力…。それは、命の容

量を減らすこと……。」

「マトリョーシカみたいに、出せば出すほど小さくなる。どんどんどんどん…、命の受け皿が縮まって…、最後にはちっぽけな命しか入らなくなっちゃった…。もう、カーズは、細菌やウイルスと同じ寿命しか生きられない、その命の中で輪廻を繰り返すだけの存在にまで命の容量を減らされてしまった。って、ことだよな？」

「…そういうこと。青いバラの花が、生命が持つ生きられる長さを示す命の力なら、ソメイヨシノの花びらは、その命の力を入れておくための受け皿を縮めることを示す。これが…、私の力……。今まで気づかなかった、力。」

あまりの内容に、ミナミと仗助以外の皆絶句した。

もはや、カーズは、思考すらできないほどの小さすぎる単位の命にまでさせられてしまい、その枠の中に完全にはまってしまい、脱出するということも、逆らうことももう二度とできないのだというのだ。

究極とは、最弱。

最弱とは、究極。

どこにもいるようで、もうどこにもいない。

それが、ミナミが出した答えであり、彼女が持つブルー・ブルー・ローズが導き出した答えだった。

未来で会いましょう

あれからというものの、ジョセフは、シュトロハイムの紹介でSPW財団にサイボーグ技術を提供してもらい、無くした左手を義手にしてもらった。

究極の生命体カーズをウイルスとか細菌レベルまで退化させたミナミは、ブルー・ブルー・ローズによる消耗が激しく、寝たきりが続いた。

すでに2ヶ月は経過し、白髪だらけになっていた髪は少しずつ元の色を取り戻しつつある。

「あれ？ リンゴの皮を剥く音が嫌いって言ってませんでしたっけ？」

「何度もやれば慣れもするさ。」

上体を起こせるベットで上体を起こして寝ているミナミのため、シーザーは甲斐甲斐しくリンゴを剥いてやっていった。

「それよりか、あれから進展は？」

「…まったくくない状況みたいだ。究極生命体とか云々以前に、時空を越えたってのは、科学をもつてしても難しいらしい。」

柱の男達との戦いが終わった後、元の世界に帰る方法を模索して貰っているのだ

が、そもそも原因が不明で、時間も経っているため帰る方法はまったく見つからない。
い。

「いつまでもここに居るわけにはいかないし……、どうしようかな?」

50年以上も過去の世界に、自分達の居場所はない。

すると、シーザーは、ふとリンゴを切る手を止めた。

「?」

「……なあ、ミナミ。」

「なんですか?」

「もし……帰る方法がこのまま見つからないようなら、……一緒に住むか?」

「……えっ?」

「も、もちろん、仗助も一緒にな。急に返事はできないだろうから、ゆっくり頭の隅に

でもおいといてくれりゃ……」

「えっ? えっ? ええええ……!? シーザーさん! 言ってる意味分かってん

ですか!」

「俺は、本気だぜ?」

「いやいやいやいや! シーザーさんみたいなモテる人が、私みたいなチンチク
リンなんて……」

「お前、それ本気で言ってるのか？ どこがチンチクリンだ…。ま、胸のデカさも尻も育ちすぎ感はあるけど、許容範囲だぜ？」

「もうー！」

「ほれ、アーン。」

「ムグツー！」

切ったウサギリングを口に押し込まれ、続く言葉を封じられた。

ミナミは、必死でガシユガシユとリングをかみ砕き、飲み込んだ。

「……もう……。」

しかし続けようとした言葉が出ず、ミナミは、そっぽを向いた。その耳や首まで真っ赤になっていた。

シーザーは、クツクツとおかしそうに笑った。

「クラツカーヴオレ!!」

「うお!? あぶね!」

そこへ、ジョセフの武器であるクラツカーが飛んできて、ハツとしたシーザーが咄嗟に逃げたため、座っていた椅子が破壊された。

「なにすんだ、スカタン!?!」

「てめえ、なに人の未来の娘を口説いてやがるんだ!? 仲を許した覚えはねえよ!!」

「お前の許可なんざいらねえよ！」

ジョセフが、キリキリと左手の義手を鳴らしながら、怒鳴る怒鳴る。

「姉ちゃん！ 口説かれたの!？」

「……。」

仗助が駆け寄り、ミナミに聞くが、ミナミは、両手で顔を覆い、表情を隠していた。しかし、耳は赤いし、首も赤いし……。

「シイイイイザアアアさああん?」

「ちよつ、待て…、仗助…、お、俺は…その…。」

「やめて、仗助。」

「けど！ ま…まさか姉ちゃん?」

「ダメ！ ダメだからな、ミナミ!! お父さん許しませんからね!!」

「今はお父さんじゃないでしょ…。」

ミナミは、はくくくつと長い息を吐いて吸った。

「ジョジョ、シーザー。話があります。」

「あつ、エリナ婆ちゃん!」

リサリサがエリナと共に部屋に入ってきた。

「どうしたんですか、先生? 話とは?」

「大事な話です。本来ならば…、カースとの戦いで察して貰うつもりでしたが…、思っていたよりも察しが悪いようです。」

「いいのよ、エリザベス。この子は、たまに変に鈍いのですから。」

「そのようですね、お義母（おかあ）さま。」

「……ん？ おい、今何って言ったよ？ エリナ婆ちゃんのこと…。」

「お義母さまと言いました、それが？」

「いやいやいやいや！ 大問題だったの！ なんで、あんたが……。えっ、待てよ…。」

「先生…？」

「…本当に察してなかったんだね。」

「変なところで鈍いんだな。」

「おい、お前ら！ なにを知って…。」

「ジョジョ。私は、あなたの実の母です。」

リサリサの口から、衝撃事実。だがミナミと仗助は、油柱の時に事前に知っていたことだ。

シーーンつとなるその場。

「ちよいちよいちよいちよい…、なに笑えない冗談言ってくれてんのかなあ？ だっ

て、あんたさあ、あの油柱で、俺のこと養豚を見るような目で見てたじゃねえかよ！」

「あれは、修行のためです。私は、母として以前に、波紋の師として、心を鬼とし、あなた達を鍛えなければなりませんでしたので。…シーザー？」

見るとシーザーは、固まっていた。漫画的表現をするなら、石になっっているみたいな…。

「シーザーさーん？」

「……ハッ！」

ミナミに袖を掴まれ、引つ張られてシーザーはやつと我に返った。

「ほ、本当なんですか!? 先生!? コイツ…、ジョジョの母親というのは!？」

「ええ。間違いなく、この子は私が産んだ子です。」

「けど、俺…、両親はもう死んじまつたって…。」

「それは、私が説明する。」

そこへスピードワゴン。

スピードワゴンが言うには、リサリサの夫は、ジョージⅡ世。つまりジョナサン・ジョースターの息子に当たる人物だった。

ところが、過去の因縁が浮上し、かつてジョナサン・ジョースターを殺したディオの配下だった吸血鬼ゾンビがひとり生き延びており、あろうことかジョージⅡ世が所属

していたイギリス空軍の司令官となっていた。

しかし、ジョージ二世は、普通の男だった。資質はあったが、波紋の修行をしていなかった。そのため、正体を探りストレイツオらに伝える前に敵に悟られ、逆襲に会い、その死は事故として処理されてしまった。

しかし、リサリサは、すぐに夫であるジョージ二世を殺した相手が吸血鬼ゾンビだと確信し、当時若かったこともあり、冷静さを欠いて単身でその吸血鬼ゾンビを倒した。だがそれがいけなかった。

何も知らない軍人に見られ、波紋のことを知らぬ者達には、リサリサがイギリス空軍の司令官を何らかの方法で殺し燃やしたのだと決めつけてしまった。

たちまちイギリス軍に指名手配されたため、そこで、スピードワゴン達は、リサリサの過去の全てを隠し、そしてエリザベスという本名も捨て、リサリサという名を名乗り、波紋使いとしての使命を全うするため、今日まで生きてきたのだ。

この件については、エリナも知っており、まだ赤ん坊だったジョセフには、両親は死んだ：ということで、孫のであるジョセフには、波紋のことを知って欲しくないと願ったのだ。

だが皮肉。やはり運命は星の血筋に強要する。

生まれながらに波紋使いだったジョセフは、運命から逃げられなかった。

「……………そうだったのかよ。」

「すまん…。ジョジョ。」

「ごめんなさい。ジョセフ…。」

「婆ちゃんは謝らなくていいさ。別に俺、怒ってるわけじゃないんだぜ？」

ジョセフは、プウツと頬を膨らませる。

すねているのだ。

「俺だけ仲間はずれだったのが、ちつとばつかし、気に入らねえってだけだぜ。」

「ああ、そうそう。あなた達を油の柱に突き落とすあと、ミナミと仗助には、私が
ジョジョの母だと言うことは言いました。」

「なに～～～～!!？」

「ご、ごめんなさい…。」

「秘密って言ってたんで…。」

「おまくえらく！」

「だってだってえ！」

「そうっすよ！ いきなり母親だって言われてたら、修行に支障が出たでしょうが！」

「そういえば、ジョジョ。スージーQという女性が、お前を探していたぞ？」

「あ、やべ、今日デートだったんだ。」

「シニヨリータを待たせるな。」

「シーザー…、俺は許さないからな？」

「へん、お前なんか怖かねえもんね。」

「ぐー…!!」

「ほら、早く行きなさい、レデイを待たせるなんて紳士として恥を知りなさい。」

「う、わ、分かっているよ、エリナ婆ちゃん！　じゃ、行ってくる！」

そうして、ジョセフは、急いで部屋を出ていった。

「まさかと思いましたが…、ジョジョの将来の花嫁となるのは…。」

「はい……。スージーQさんです。」

「もし…正妻の人と結ばれて貰わないと…、色々大変でしたから…。」

リサリサの屋敷で色々頑張ったのだ。ジョセフがスージーQと結ばれるように。

「しかし…、将来的には、あなた達が生まれるきっかけとなる不倫をやらかすのですね？」

「は、はい…。その予定になっています…。」

「あとで、折檻します！」

「エリナさーん!?!」

持っていた杖をギリツと握りしめたエリナに、スピードワゴンが焦った。

「自業自得だ。」

「ところで、シーザー。あなた、ミナミに、一緒に住まないかと言っていたようですね？」

「ハッ!!」

シーザーは、ハッとした。

リサリサは、血縁関係上、ミナミと仗助の祖母なのだ。

つまり…、そういうことだ…。

「波紋の修行だけじゃなく！ ミナミにふさわしい、私を納得させるだけの男にして差し上げます！」

「ひひひひひひ!!」

「し、シーザーさん…、ファイトっす。」

「……あれ？」

ミナミは、ふと自分の手が透け始めていることに気づいた。

「あつ！ 仗助も！」

「まさか帰れるのか!?!」

「分かんないけど、そんな気がする！」

「おいおい、急だな！」

「ミナミ！」

「ごめんなさい。…シーザーさん。気持ち嬉しかったです！ 未来で会いましょう

！ さよなら！」

「ミナミ……！」

消えていくミナミを抱きしめようとしたシーザーだったが、抱きしめる直後で、ミナミと仗助は消えた。

帰った時、ミナミの状態を見て、未来の承太郎達は大慌てとなった。

すぐに病院の手配。健康検査。

過去への旅の原因となった、虹村家に納められていた謎の羅針盤の話も…。

色々終わった後、ジョセフがやってきて、ぜひ会わせたい人がいると言った。

すると、初老という感じの金髪の男…けれど、目の下の変なアザは…。

「シーザー…さん？」

「よっ、久しぶりだな。50年以上ぶりか？」

すっかり、若かった頃の勢いは無いが、落ち着いた声がそう言い、そして、少しシワのある顔が笑顔になる。

「ああ…、シーザーさんだ…！」

その笑顔は、過去の時代で見た、シーザーの笑顔と同じだった。

思わず涙ぐむミナミに、シーザーが近寄り、ギュツと抱きしめた。

「ふえ!？」

「あん時、最後に抱きしめ損なつたからな。50年以上ぶりなんだし、いいだろ、ジョジョ?」

「こんんの……、スケコマシが……!!」

ジョセフが杖を振り回して怒った。

「シーザー……!!」

病室に來た仗助も怒り、一気に騒々しくなる。

シーザーは、ワハハハ!と笑いながらもミナミを離そうとしない。

ミナミは、シーザーの腕の中で、笑った。

双子の星の過去への旅は、こうして終わったのだ。